このキノコ人間が。

天城春香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
このキノコ人間が。

【Ｎコード】
Ｎ８３６９Ｖ

【作者名】
天城春香

【あらすじ】
或る人物の日常を日記と言う形態を用いて描くものです。物語には起伏があるかもしれませんし、無いかもしれません。この人物は狂い続けるかもしれませんし、まともになるかもしれません。章数は多くなってしまいましたが、どこから読んでもたぶん問題ありません。ご安心ください。

２０１１年８月１５日（前書き）

※これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

２０１１年８月１５日

８月１５日（月）晴れ

今朝、最初に耳に飛び込んできたニュースは、県内に二つしかない動物園のうち、家に近いほうから一匹の猿が逃げ出した、というものだった。インターネットよりも先にテレビで知った。ニュースがインターネットより早く私の耳に入ってくるとは珍しい、と思っていたが、今日はパソコンの電源を入れるより先にテレビの電源を入れていたのだ、ということに、ニュースを知って五分後に気がついた。私は狂っている。

私は狂っている。体内時計が狂っていて昼夜逆転した生活を送っているとかそんなヤワな狂いかたではなく、本当に気が狂っているのである。こんなことを自称しても信じない人が大半だろうが、医師は私を指して「君、気が狂っているよ。すぐに仕事を止めて福祉で暮らしなさい」と言った。とんでもない医者である。それを聞いた私は市役所へ赴き、福祉の手続きを取り、それ以来福祉で暮らしている。全く、自分が狂っていると自覚している人間を狂っていると認定して福祉として金を提供するとは、とんでもなく狂った世の中である。そしてとんでもなく狂った私である。ちなみに福祉で支給された金は親の財布に収まっている。

私は狂っている。この狂いは、きっと直らないだろう。そんな気がしているのではなく、後で書くがこれには根拠があって言っているのである。だから私は日記を書くことにした。この狂いが進行すると、きっと私は最初に人の顔が認識できなくなる。次に、絵に描かれた記号としての顔も認識できなくなる。そして最後に、文章も認識できなくなる。文章が認識できなくなると、日記が書けなくなる。この日記が途切れたその日が、私の狂いが極に達した日、とい

うことになる。そんな記録が残したくなったので、私は今日から日記を書く。日が開いたら、二日分書く。とにかく短くても、毎日分書くのだ。そうしている限り、私は完全に狂ったことにはならない。病院や市からは完全な狂人と認定されて入るが、私の中では、まだ私は完全な狂人ではない。そう考えている。でも狂っている。少しは狂っている。

今日の晩餐にはオムレツが出た。オムレツとは通常、ホテルなどでは朝食として饗されるものである。しかし我が家では、番に出た。何がおかしい。おかしなことなど何も無いではないか。夜にオムレツが出ることの何が変だと言うのだ。私は狂っているが私に食事を饗してくれる母親は狂っていない。狂っていないから働けているのだ。そしてオムレツにはキノコが入っていた。シメジではなかった。シイタケでもないようだった。エリンギでも、当然マツタケなどでもないようだった。味の無いキノコだった。このキノコのせいで、私は狂い続けているのではないか。そんな気はしている。しかし私にそんなことをやる母は、狂っていない。働けているのだから、狂ってなどいないのだ。

２０１１年８月１６日（前書き）

※これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月16日

8月16日（火）

母は通訳の仕事を続けている。父はどうなっているのか、最近音信不通なので分かっていない。とにかく働こうとすれば必ずといっていいほど断られるほど狂った私にとって、親の存在は生命線である。つまり私はいわゆるニートと呼ばれているものに分類される、ということになる。不本意ではあるがそれが真実となってしまうのだから仕方がない。そんなわけだから、当然近所づきあいなど全くといっていいほど私には無い。ではどうやって一日を過ごしているのかと言うと、恐らく世の大多数のニートと同じである。何もやっていない。いつか罰が当たればいいと思う。親が死ぬクラスの罰が当たればいいと思う。

父は音信不通であると書いたが、別に行方不明なわけではない。私個人に対して音信普通なのである。狂った私に対し、全くコンタクトを取ろうとしない。つまり私は肉親に無視されているのである。それほど狂うということは罪深いのか、と考えたが、確かに罪深い。親は私が生まれたとき、きっと私に期待をかけただろう。将来は狂った人間にきっとなれよ、とは間違っても願わなかっただろう。私は死んだほうがいいかもしれない。ああ、嫌になる。こんなことに対する意見ばかりが正常だ。

明後日は人と会わなければならない。私のように狂ったもの同士が保健センターのサロン（なんという言葉を使うのだ）に寄り集まるのである。寄り集まって何をするのかと言えば、なにも建設的行為を行わないのだから困りものである。とにかくひどい。何も起こらない、という事実がひどい。そんな集まりがあさってに控えている。

昨日書いている途中に書くことを忘れてしまっていたが、私が狂っている原因とは何だろう。ところで突然話は変わるが、今日の晩餐として饗された牛丼にも、無味の私の知識には無いキノコが入っていた。私はこれを食べた。母親が作った牛丼に入っていた無味のキノコを食べたのである。なぜなら、私に食事を残す権利など無い。狂った人間が親に逆らうと社会的制裁を食らうのである。根拠は無いがきっとそうだ。ところで私が狂っている原因とはなんだろう。

２０１１年８月１７日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

２０１１年８月１７日

８月１７日（水）

今日は外に出た。ということは、昨日は家から出なかった、ということだ。昨日の日記が家庭内の事情の描写に終始していたのはそのためである。ともかく今日は外に出た。しかも日中である。狂った奴が日中に出歩くと善意の普通の人と視線が衝突して酷い目に遭う。そうに決まっている。と覚悟を決めていたかもしれない。私が住んでいたのが都会であったのならば。しかし私が住んでいるのは宮崎県という行けども行けども田舎が続く土地であるため、平日の日中に外に出ても人と会うことは少ない。この点に関してだけは、宮崎と言う土地に感謝している。しかしきっと近所での私の評判はすこぶる悪いに違いない。だって狂ってばかりで稼いでいないのだから。近所の普通の人から話を聞いたわけではないが、そう思われているに決まっている。

宮崎という田舎であっても、コンビニくらい存在する。ちなみに宮崎にローソンが来たのは９０年代末である。田舎だ。実に田舎だ。悪いことは言わない、田舎暮らしなんかに憧れないほうがいい。といっても狂った人間の忠告など誰も聞かないか。それにしても誰に見せるつもりも無いのに、私は誰に忠告しているんだ。エア友達か。ともかく私は家から出て、コンビニに入った。そしてコンビニに入ってしまうと、酒のコーナーに向かってしまった。そして親の財布から抜き取った百円玉を使って酒を買ってしまった。飲んでしまった。そしてコンビニを出て三十歩歩き、吐いた。酒に関わるといつもこうだ。今度からは飲まないように気をつけなければならない。

宮崎という田舎の平日でも、たまに人とすれ違う。今日は一人とすれ違った。その人はすれ違いざまに私に視線を向けた。寝癖を見

たのだろうか、それとも狂った人間が珍しいのだろうか。私のように誰が見ても狂っていると分かる人間は、珍しいに違いない。都会だったらきっと、狂った人間が数多く闊歩しているだろうから、私が特別に視線を向けられることなく済んだだろう。田舎が憎い。都会が羨ましい。田舎で死にたくない。都会の雑踏の中で死にたい。そしてきっと、「こんな街中で死ぬんじゃねえ」と悪態をつかれるのだ。それでも田舎で死ぬよりずっといい。

昨日に続いて今日も晩餐は丼ものだった。親子丼だ。鶏肉がささみしか使われておらず、しかも硬い。狂った人間には豪華すぎる食事である。卵と鶏肉と玉ねぎのほかに、キノコが入っていた。味は無かった。昨日のキノコと同じキノコだ。

２０１１年８月１８日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月18日

8月18日（木）

本を読むときは必ず没頭するようにしている。そうしていないと私はもっと狂うしかやることがなくなってしまう。何でもいいから何もしないよりは何かやれ、とは母親の口癖である。……だった。でも今はあまり言われない。諦められているのか、それとも呆れられているのか。

今日は保健センターのふれあいサロンへ行く日なので、母に送ってもらって保健センターへ行った。サロンといってもやることといえば私のように狂った人たちが集まって喋ったりボードゲームをやったりするだけの集まりである。私は喋ることもボードゲームも得意ではないのでいつも本を持っていく。そしてずっと本を読む。喋りもせずに、人を見もせずに。きっとこの日記を誰かが見ているとしたらきっと私のことを軽蔑するだろう。狂った私でもそのくらいのことは予想ができるのである。

サロンから帰ってきてパソコンを開いていたらメールが届いていた。そこには「あなたの書いている日記について、お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来て下さい」と書かれていた。差出人の名前はどこにも書かれていなかった。怖かったのですぐに削除した。

今日の晩餐は豚キムチが出た。ご飯と豚キムチ、それだけである。味噌汁などと言うぜいたく品は私の食事には出ない。今日もその中に昨日と同じ形状のキノコが入っていた。もしかしたら私が狂う原因も、夕食後に必ず数時間意識を失ってしまうのも、このキノコが原因かもしれないと思い、今日は思い切って残してみた。するとキ

ノコだけ残った皿を見て母が「食べなさい」と言った。働いていない私には拒否権など無い。そんなネット内の世論のような言い方だった。その通りなので仕方なく食べた。そして今日もまた、さっきまで意識を失ってしまっていた。きっと私はもっと狂うだろう。そして文章を書くために保っているなけなしの正気も失い、この日記は終わるのだ、きっと。

２０１１年８月１９日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月19日

8月19日（金）

もうすぐ週末が来る。嫌だ。週末になれば狂っていない人々が外を出歩くだろう。そしてそれらの人々は、狂った私のことを注目するだろう。だから私は外に出られなくなる。家の中に閉じこもって読書とインターネットばかりやっていなければならなくなる。最近は読書をしていてもインターネットをやっていても気分が悪くなる。暗い気持ちになる。これは狂いが進行した証なのだろうか、それとも常人に近づいている証なのか。どちらにしても嫌だ。狂うか鬱になるかの二択。どちらも嫌だ。

今日読んだ本には。狂った人間が出てきた。しかし最後には大人になって、狂いから脱した。タイトルは「時計仕掛けのオレンジ」といった。若いということは狂っているのだろうか。だとしたら私ももっと歳を取れば、狂った状態から開放されるのだろうか。歳を取っても狂い続けるとしたら、そんなひどい悪夢は無いように思える。そうなるくらいなら、狂いが臨界点に達して何も認識できなくなる時期が早く来てくれたほうがいい。読書をしても心が豊かになった気がしない。これは本が本だからだろうか、それとも私のせいだろうか。近頃、悪いと感じることが全て自分のせいであるような気がする。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」昨日削除した匿名のメールの文面がまだ思い出せる。「お断りします」とか返信くらいしておくべきだったかもしれない。もし本当に来週の月曜日にドン・キホーテに行ったりしたら、誰かが待ち構えているのだろうか。それともいたずらだったりするのだろうか。どっちがいいか、と訊かれれば、どっちも

気が重い、と私は答える。だからセルシンを一錠余分に飲んだ。特に何も変わらなかった。

晩餐にキノコ鍋が出てきた。エノキやシイタケやシメジや白菜に混ざっていつものキノコも浮いていた。何の工夫も無い、私にキノコを食べさせるためだけの食事だった。母は勝手に私の取り皿に、いつも私に食べさせている味の無いキノコを入れた。やけになって馬鹿食いした。満腹になって眠くなった。だからさっきまで寝ていた。この怠け者。死ね、私め。

２０１１年８月２０日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

２０１１年８月２０日

８月２０日（土）

昨日の「時計仕掛けのオレンジ」で図書館から借りた本を全て読み終わってしまった。読む本がなくなるということは、インターネットしかやることがないということであり、インターネットしかやることがないということはインターネット内のふとした書き込みが気になって気分が沈んでしまう危険性が増えるということであり、それを避けるためには私は図書館へ行かなければならなかった。私に本を買う経済力など無い。狂った人間にお小遣いを渡すような親も私の家にはいない。親の財布は鍵のかかる化粧箪笥の引き出しの中に入れられてしまっていた。週末は外に人の目が増えるので外出は避けたい、と昨日書いたが、仕方がないので目を伏せながら家を出た。

そして自転車に乗って図書館を目指した。母と兼用の、錆び落としが欠かせない十年以上使っている自転車である。自転車は好きではない。周囲の景色が流れるのが早すぎて混乱してしまうし、何より転ぶとほぼ確実に怪我をしてしまうからだ。しかも死なない程度の怪我だ。車に轢かれて死ぬよりつらい目に遭うことになる。だから自転車は好きではない。乗れなかったらよかったのに、と思うのだが、幼稚園児の頃、まだ両親が私に期待していた頃に、私は練習してしまい、自転車が乗れるようになってしまった。だから仕方なく自転車を使って、本を返却して新たに数冊の本を借りた。カウンター越しの相手なら声を出すのは平気だ。このあたり、私がまだ正気を保っているような気がしてほっとする。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」木曜日にパソコンに入っていた匿名のメ

ールがまだ記憶から消えない。メールマガジン以外のメールが届くことは稀だからだ。いや、初めてだったかもしれない。私はパソコンを使っていてよかったと思えたことがまだ一度も無い。それなのに、毎日パソコンを開いている。そしてインターネットを覗いている。あまり楽しい趣味ではない。でも、他にやることが無い。楽しくなる方法を検索すればインターネットは楽しくなるだろうか。

今日の晩餐は焼きそばだった。それなのにまたキノコが入っていた。どうしてキノコが入っているんですか、と私は母親に敬語で尋ねてみた。母親は私のことを無視した。ついに私は家族全員から無視されるようになったのだ。ついに、などという言葉を使ったところで嬉しくもなんとも無い。

２０１１年８月２１日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月21日

8月21日（日）

ふと思い立ち、ヤフー知恵袋に「味の無いキノコって存在しますか」と書き込んでみたが、反応が怖いので書き込んで以来まだそのページを開けずにいる。これは狂っているのではなく、単に私が元来臆病なだけである。そしてこのまま放置し、忘れかけた頃に除いてみて何の反応も返ってきていないことに少しだけ落胆し、また「私は狂っている」などとこの日記に書くのだろう。だから私はこの書き込みを自分の記憶から消すことに決めた。

今日は日曜日であり、外に出ると人の往来が平日より激しく、つまり狂っている私を奇異の目で見る眼球の数が増えるのである。だから私は外に出ないことに決め、本を開いた。しかし集中できなかったので、座禅でも組んでみることにした。あまりにもくだらない行為である。しかし私にはもう、くだらないことくらいしかやることが無いのだ。そして座禅は十分足らずで挫折した。あまりにも頭が静かになって狂いが加速しそうになったからだ。文字や動画や音楽といった刺激を常に与え続けていなければ狂うような気がして、読書やインターネットを中断するのが怖い。まるで怠け者の言い訳である。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」試しに何も見ずに木曜のメールの文面を思い出してみたところ、ほぼ完璧に記憶できていたので自分でも驚いた。明日はドン・キホーテに行ってみよう、と昨日より精神の調子がいい私は決断してみた。しかしこの決断も明日の朝には鈍っているかもしれない。

それにしても、ここまで書いたものを読み返してみると、今日の私はまるで正気のようである。ということは、当たり前だが私は狂っていないということになり、狂っていないのに働いていない私はただのカスということになる。いや、狂っているから働けないなどと言っている奴もカスである。つまり私はカス呼ばわりされる運命から逃れられない、ということになるのか。こんなこと、とてもインターネットに書き込んだりなどできない。ただの泣き言じゃないか。

夕食は饗された。しかし母親はまだ私のことを無視し続けている。夕食に出たのは塩鯖だった。キノコはどこへ行ったのか、と思ったら小鉢にキノコが入っているものが鯖の隣に置かれていた。食べなかったら今度はどうなるんだろう、と考えながら、私はおとなしく出されたキノコを食べた。やはり味は感じられなかった。

２０１１年８月２２日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月22日

8月22日（月）

目覚めた私はバイパス下のドン・キホーテへ向かった。「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」という、先週木曜日に送られてきたメールの文面がまだ忘れられなかったからだ。到着してから、もし来なかったらどうなっていたのだろう、と考えた。そして何者かが家に襲いに来るのではないかという被害妄想に達してしまい、私は震えた。そんなことを考えながらドン・キホーテを歩き回った。この店には物という物が詰め込まれていて、ここの近所に済んでいる人間は買い物に困ることは無いだろう、と思われた。しかし金銭を少しも持っていない私にはこれらの積み上げられたものが全て無駄に思えた。どうせ買えないのだ。

午後になっても、何も起こらなかった。もしかして私が呼び出した人物を特定して話しかけなければならないのか。狂った末にコミュニケーション能力を失ってしまった私にそんな高度なことが可能なのだろうか、いや不可能だ、と帰る時間を計算して焦り始めて私は考え始めた。すると、背中に何者かの気配を感じたので、私は振り向いた。しかし何者かは私の視界から外れた。逆方向に振り向いた。何者かはそれでも私の視線から外れた。何度振り向いても、一回転してみても何者かは私の背後の視界の外から出ようとしなかった。姿を見せずに何をするつもりなのか、分からなくなった私は恐ろしくなって入り組んだ店内を転びそうになりながら駆けて、店からも出て自転車に飛び乗り、振り向きもせずに一目散に家へと帰った。そして自室に飛び込んだ。もう自室から出たくない、という気持ちが、自分の部屋まで戻った私を支配していた。

それでも晩餐のためには部屋から出るしかなかった。私に饗される食事は夜の一食のみである。食べなければ死んでしまう。例えキノコが混じっていたとしても。今日の晩餐はカレーだった。当然のようにキノコが混ざっていた。諦めの境地に達していた私は、キノコ入りのカレーを腹に押し込んで自室に急いで戻って横になった。

２０１１年８月２３日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月23日

8月23日（火）

あれは確か火曜日の深夜だったか。だから水曜日の日記に書いてもいい事柄だ。

私は深夜、外を出歩いていた。田舎の深夜は通行人がほぼ皆無なので安心して出歩くことができる。しかしその日は、安心できないようなものと出くわした。それは猿だった。野性の猿か、と思ったが、ずいぶん前に動物園から猿が逃げ出したというニュースをテレビで見たことを思い出した。猿と目が合った私は、歩みが止まった。猿も動きを止めた。しばらく睨み合った私と猿は、数分間静止していただろうか。双方とも、どちらからとも無く視線を外し、それぞれ別の方向へ歩み去った。通報したほうがよかったのかもしれないが、深夜だし、私は狂っているし、それは無理だ。

帰るとメールが届いていた。「はじめまして。猿です」で文面が始まっている上に匿名だったのですぐに削除した。どうも最近、不審な人々に私のメールアドレスが駄々漏れしている気がする。何か嫌なことの前兆でなければ良いのだが。

昼間、一人部屋でじっとしていると、自分がすごく罪深い人間であるような気がしてきた。なので、自分に罰を与えたほうがいいのではないか、と思い立ち。しかし有効な方法がすぐに思い浮かばなかったので、壁に頭をぶつけてみた。ごん、と大きな音がした。家中に音が響き渡ったに違いない。しかし、在宅で通訳の仕事をしている母から咎められたりすることは無かった。ずっと無視されているのだ、当たり前だ。私はもう期待もされていないのだ、当たり前だ。死んだほうがいい、と思った。しかし、死ぬ勇気が出なかった。保留である。駄目だ。私はダメだ。

また匿名のメールが届いていた。「昨日は楽しいデートでしたね」と書かれていた。昨日、誰かに会ったか、と思い返してみたが、ドン・キホーテで姿を見せずに私の背後を付け回した人物しか思い浮かばなかった。あれがデートだと言える頭があるなら、その人物は十分狂っている。私より狂っているかもしれない。そういえば明日は病院へ行く日だ。病院へ行って狂いを治療するのである。もう二年くらい通っているが、ただ薬を処方されるだけで、一向に狂った頭が改善される兆候は見られない。あの病院はヤブなのではないか、と私は少し思っている。

昨日書き忘れたが、私は背後を姿を見せずに付いて来る謎の人物に、一言だけ声をかけられた。「あなたはきっと治らない」と一声。その言葉には十分な説得力が会った。自分でも自分の狂いが治るとは思えなかったからだ。そんな些細なことは覚えているのに、今日の夕食は覚えていなかった。キノコを口にしたことだけは覚えているのに、献立は思い出せない。

それと言うのも、ついさっき、冷蔵庫から酒を勝手に奪って飲んだからだ。数分前まで、私はいい気分になっていた。その拍子に晩に何を食べたのかを忘れた。だから今日の日記は時系列がとっちらかっている。明日はちゃんと書こう。読み返したときに意味不明では困るから。

２０１１年８月２４日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

２０１１年８月２４日

８月２４日（水）

起きると、一階から家族のものではない男の声が聞こえた。それが誰なのか、私にはすぐに予想がついた。母の担当編集者である。母は週に一度か二度、定期的に編集者と居間で打ち合わせをしている。とても部屋から出られない。狂った私などを見知らぬ他人に見せて編集者を不快にさせて編集者が母に近寄らないようになって母の仕事が減って収入が減ると夕食すら出してもらえなくなるかもしれない、そうなると私は苦しい餓死を体験しなければならなくなる、そう思った私は、編集者が帰るまで自分の部屋の自分の布団の中でうずくまっていた。一生そうしていたかったが、編集者が帰ったのと今日は用事があったので昼ごろには布団から出た。

用事とは通院である。狂った私は狂いを矯正するための薬の処方箋を貰いに行くために、二週間に一度病院へ行かなければならないのである。診察には期待していない。いつも「何か変わったことはありましたか」「何も起こりませんでした」「そうですか。ではお薬出しておきますので」で終わってしまうからだ。きっとあの病院は収入源確保のために私のことを狂っていると診察し続け、処方箋を出し続けているに違いない。でも今は実際狂っているので通わないわけにはいかない。もし治ったら盗られた金額分の復讐をしに行こう。私は狂った頭でそう思った。

そんな気持ちに支配されていたからか、午前中ずっと寝ていてそれから起きてすぐ外に出たせいで気分が悪くなったのか、それとも昨日盗み飲んだ酒が残っていたのか、今日の晩餐は食べ終わってすぐに吐いた。吐いたものの中には原形を保っているキノコが含まれていた。いつぶりだろう、私がキノコを消化吸収しなかったのは。

２０１１年８月２５日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

２０１１年８月２５日

８月２５日（木）

生活そのものに価値と言うものが数値として示されたりすることの無い世の中でなくて本当に良かった、と思う。そんなことになったら人々の生活の価値の数値で順位が生まれてしまうし、私のような人間の生活などにはとても低い数値がつけられて凹んでしまうだろうし、激情家が低い数値を付けられたりなんかしたら怒り狂ってきっと犯罪に手を染めるだろう。それも派手な犯罪だ。だから人間の生活が数値化されていなくて本当に良かった、と思う。思ったからどうなんだ、とは聞かないで欲しい。ただ思いついただけだから。

今日は木曜日なのでふれあいサロンへ連れて行かれた。ふれあいサロンでは交流会が行われていて、参加者にはお菓子が配られたりフルーツポンチを作って食べたりなぜか「上を向いて歩こう」を合唱させられたりした。「上を向いて歩こう」は嫌いな歌だ。なんだか皮肉に聞こえる。それに上なんか向いたところで手の届かないものばかりが目に入って気が重くなるばかりである。そんな歌じゃないことくらいは分かっているが。

帰ってきてパソコンを開くと匿名のメールが届いていた。「先日のデートは楽しかったですね。次のデートは日曜日にしましょう」とだけ書かれていた。私にはデートなどと言う高等で狂っていない人間がやることを行った覚えなど無い。きっと間違いメールだろう。日曜日にドン・キホーテで私を付回した人物から送られてきたメールだとしたら。だとしたら、不気味すぎて思わず震えてしまうだろう。狂っているが故に社会的な力を何も持つことを許されない私にはそのくらいしかできないのだが。

今日の晩餐にはキノコの丸焼きが出された。まるで私が昨日キノコを消化せずに吐いたことを知っているかのような献立である。そういえばキノコを食べずに迎えた今日は、やけに調子がよく、ちょっとした考えまで生まれ、気持ちも心なしか前向きになっていた、ような気がする。しかし、キノコの丸焼きを食べないわけには行かなかった。もしかしたら、と気体を込めて口に入れてみたが、やはり味の無いキノコだった。吐かなかった。

２０１１年８月２６日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

２０１１年８月２６日

８月２６日（金）

早朝、まだ父も母も妹も起きていない時刻に、冷蔵庫から酒を盗み飲み、昼まで寝ていた。昼間、母が部屋に閉じこもって翻訳の仕事に精を出している隙に、また冷蔵庫から酒を盗み飲んで夕方まで寝ていた。こんなに無駄に過ごした一日はそう無いだろう、と思う。そして私はきっと夜も眠るのだ。他にやることが無いんだから。

ハローワークにいかなくちゃ、と起きている間に（酔ってはいたが）私は思った。働かなければ私は一生狂ったままだ、と感じたからだ。でもそう決意してからすぐに、私は酒を飲んでしまった。狂いたいのか正常になりたいのか、自分でも自分に問いたい。そして問いかけたところでちゃんとした答えは返ってこないだろう。何せ酔っていたのだから。

酔っていて記憶が曖昧なのだが、どこかに電話した気がする。どこに電話したのかは覚えていないが、「月曜日に来てください」と返された。月曜日はどこかに出かけようと思う。どこに出かけるのか見当も付かないが、明日には思い出せるんじゃないか、と私は未来の私に余計な期待をかけた。

酔っていて眠っていたせいで、晩餐には出られなかった。深夜、ようやく酒が抜けて目が覚めて、トイレに行こうと部屋を出ると、扉の前にキノコを茹でて刻んだものが皿に盛られて置かれていた。酒のせいで空腹だったのでこれを食べた。すると意識が朦朧となって、トイレに行ったのか行かなかったのか分からないまま、私はついさっきまで寝ていた。これを書いている今も、起きているのか起きていないのか自分では判断できない。でも、狂ってはいないと思

う。馬鹿になっているのだ。

２０１１年８月２７日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月27日

8月27日（土）

昨晩食べなかったせいで、空腹で眠れなかった。そこで早朝、冷蔵庫に何か食べるものは無いかと漁ってみたがそのまま食べられそうなものは見当たらなかった。生野菜、パックのままのハム、バター等。仕方がないのでテレビをつけるとアニメでカードの対戦をやっていた。勝たないと人類が危ない、らしい。カードゲームで。遊ぶ相手が居て羨ましい、と思っていたら窓の外に猿の姿が見えた、気がした。早朝だし、寝ぼけていたせいで見えた幻覚だろう。空腹を紛らわせるために部屋に戻ってまた布団を被った。

昼間、パソコンでインターネットをやっているとメールが届いた。匿名だった。「猿です。遊びませんか？」とだけ書かれていた。昨日の人物からだろうか。本当に去るからメールが送られてきた、と言うことはあるまい。どうしようもないので無視して削除し、このメールをこなかったことにした。しかしこうして日記に残してしまった。この段落を消すべきか、書いている今も悩んでいる。

酒の効能を思い知り、もっと飲みたいと思った。しかし飲むと馬鹿になる。その証拠として、酒に酔ったまま書いた昨日の日記は馬鹿みたいだ。だから我慢しなければならない。いや、狂っているより酔った馬鹿で居るほうがいいのかもしれない。そう考えるとますます飲みたくなった。しかしこれ以上勝手に飲んだら家族にばれてしまう。ただでさえ言葉を交わしてくれない家族が酒を盗んでいるという事実を知ったらどんな手段に出るのか。考えるだに恐ろしかったので、私は気合を入れて我慢した。息を止めたり、腕立て伏せをやって無理矢理疲れて昼寝してみたりした。

昨日電話したところを、夕方になって思い出した。何の前触れも無く。急に思い出した。私が電話した先はハローワークだった。「月曜日に来てください」と言われたということは、私は月曜日にはハローワークへ行かなければならない。しかし狂った私が今更ハローワークへ行ったところでまともに仕事を見つけることなどできるのだろうか。到底そうは思えない。しかし約束してしまった。約束を破るのは怖い、これ以上人を失望させることは怖い。月曜日にはハローワークへ行かなければならなくなってしまった。

晩、昨日は何も口に入れなかったせいで食事をいつもの倍のスピードで食べてしまった。いつものように味の無いキノコ（恐らく私が狂っている原因）も入っていたが、構わず食べた。食事にがっつく私の姿は、浅ましかった。母はそんな私をただ無言で睨んでいた。父と妹は、私に視線すら向けなかった。

２０１１年８月２８日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月28日

8月28日（日）

家に知らない女の子が訪ねてきた。誰も応対しないので仕方なく玄関に向かった寝起きの私に向けられた女の子の一言は「さあ、遊びましょう！」だった。滝本竜彦の小説が思い出された。その人物の小説どおりの展開だと私はやたらと自罰的な人物と言うことになってしまう。自分のことを狂ってる狂ってるとこんな風に日記に書き続けている私は自罰的な人間なのか。そうなのかもしれない。そう考えながら私はぎこちなく女の子と話し、おっかなびっくり一緒に遊んだ、その内容については詳しく書かない。子供がやるような他愛も無い遊びで、そのあまりの幼稚さに泣きそうになった、とだけ書いておく。

女の子がやってきたのはきっと幻覚だったのだ、さっきまで一緒に遊んでいたのも幻覚だったのだ、と私は夕方、女の子が帰ってから思った。しかし私の手元には女の子から手渡された箱があった。誕生日プレゼント、とのことだった。私の誕生日は既に通過した水曜日、つまり23日だ。遅すぎやしないか、と訊いてみたかったが訊けなかった。「ああそう、じゃあいらないね」と言われて手元から奪い取られるのを恐れたから、かもしれない。自分でもどうして素直に受け取ったのか理解ができない。

箱を開け、誕生日プレゼントを腕に巻いてみた。似合っているか似合っていないかで言えば、不釣合いな代物だった。しかも私は特別に用事があるとき以外は外に出ないので、家の壁にかけられている時計で事足りてしまう。女の子には申し訳ないが、このプレゼントは無意味だ。

そういえば、女の子の名前を聞いたのか、聞いたとして覚えているのか自分でも分からない。今思い出そうとしても、出てこない。あれは本当に幻覚だったのかもしれない。じゃあどうして手元に腕時計があるのか。それは知らない。

死ぬ夢を見た。死のショックで目を覚ますと深夜だった。もう晩餐は出ないだろう、と予想しつつも、もしかしたら、と期待して居間に下りてみると、何の用意もされていなかった。私は絶食しなければならないようだ。餓死が冗談では済まされなくなってきた。

２０１１年８月２９日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

２０１１年８月２９日

８月２９日（月）

今日は月曜日であり、今日から日中に外を出歩く人の数が少なくなると思うと少しは気が楽になる。でも今日は外に出る幼児がない。これは楽だ、今日は一日寝て過ごそう……と思っていたのだが、ハローワークへ行く約束を酔った勢いでやってしまったことを思い出してしまった。忘れていたほうが幸せだったのに。なので、昼まで寝てから私は家を出た。仕方なくだ。約束を破っても殺されはしないだろうが、狂った心が許してくれない。お前は狂っているくせに人との約束まで破るのか、お前はつくづく価値の無い人間だな。自分にそう言われそうな気がするので、仕方なくだ。

ハローワークでは狂人用の受付があり、そこで職を探すに当たってのアドバイスを受けた。「身なりはきちんと整えてください」「働きたい、という意思を先方にしっかりと示すこと」などといった内容だった。受付の人は中年の女性だった。暇な主婦だろうか、と思った。私は暇な主婦より暇な人間だ。本当に価値の無い人間だな。

ハローワークから命からがら帰ってきてパソコンを立ち上げるとメールが届いていた。匿名のメールだった。「私の名前です。覚えて置いてください」と書かれ、その続きに名前が書かれていた。私は人の名前が覚えられない。現に今、パソコンを閉じて日記を書いている今、思い出そうとしても思い出せないくらい人の名前に関する記憶力は弱い。なぜなら人の名前には意味が無いからだ。勇、という名前だからと言って勇敢とは限らない。恵子、という名前だからといって恵まれているとは限らない。関連性の無い記号だから覚えられないのだ。だからメールは消さないでおいた。名前を思い出したくなったら見返せばいい……ん？　どうして思い出したいんだ

ろう。

晩餐にはオムライスが出た。もちろん味の無いキノコが混入されていた。味が無いくせに、そのキノコが喉に入ると急に吐き気がこみ上げてきた。しかし食卓で吐いたらきっと後処理は自分でやらなければならなくなる。自分のものとは言え嘔吐物の後処理は嫌だ。だから頑張って全部飲み込み、トイレに入ってすぐ吐いた。きっと明日も栄養失調だ。

２０１１年８月３０日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月30日

8月30日（火）

起きると足がふらついた。何も食べていないせいである。しかし、キノコを食べて狂い続けるのと、こうやってキノコを消化するのを拒否し続けてやがて餓死するのではどちらがましだろう。少し考えてみた。キノコを食べずに正気でい続けたほうがいいのかもしれない、という考えが頭に浮かんだ。私の死期は近づいているのかもしれない。

窓から空を眺めた。キノコを消化せずに眺める空はいつもより青く見えている気がして、空を見るくらいしかやることの無い自分の立場に珍しく危惧を抱いた私はハローワークへ向かった。しかし、私の担当者（昨日決まったらしい）は月曜日と金曜日にしか出勤していないので今日のところは帰ってください、と言われてしまった。私はこの正気でいられる時間をどう使えばいいのだろう、と悩みながら家に帰った。

家に帰ったのを狙い済ましたかのように、家の電話が鳴った。翻訳作業が忙しい母がいつまで経っても電話に出ないので、私が出てみた。すると少女の声が「はーい、私でーす」と名乗った。誰なのかわからないので名前を訊くと、「昨日のメールに書いたけど？」と帰ってきた。昨日のメールには確か名前が書いてあったはずだ。思い出そうとしたが思い出せなかったのでこちらから尋ねると、「榎本なごみだよ」と帰ってきた。どうして電話してきたのか尋ねてみると、「あなたが出ると思ったからね」と帰ってきた。どういうことか分からなかった。どうして私が出ると思ったから電話したのか、私にどんな用事があって電話してきたのか、さっぱり分からなくなり、もしやこの榎本なごみ（何度も書かないと忘れてしまう）

なる人物は私を騙そうとしているのではないか、いや自由に使える金を少しも持っていない私を騙してどうする気だ、笑うのか、嘲笑するのか、そんな頭のおかしい考えが続々と浮かんできて怖くなったので私は電話を切った。するとすぐに電話が鳴った。取ると、「ひどいな、急に切るなんて」と榎本なごみの声が聞こえたので私は受話器を叩きつけて部屋に戻って布団を被って夕方まで震えていた。

そして夜になり、晩餐の出る時間になった。ひじきの煮物の中にキノコが刻まれていた。昨日はこれを消化しなかったから調子がよかった。しかし調子がよかったからと言って良いことは何一つとして起こらなかった。狂っていたほうがましだ、狂っていることに頭を抱えていたほうがましだ、そう考えた私はキノコごとひじきの煮物を口に入れた。

２０１１年８月３１日（前書き）

※これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月31日

8月31日（水）

朝、起きると私は狂っていた。まるで現実が幻覚に用に見えていた。空の色も昨日ほど青く見えない。昨日の日記を読み返してみると、まるっきり普通の駄目な人間の生活そのものが書かれていた。狂っていないと私はこんな感じの生活を送ることになるのか。怖くなったので、私は日記をすぐに閉じた。これからは日記を書くときはキノコをちゃんと食べよう、と心に固く誓った。常人のまま駄目人間と言われるくらいなら狂った駄目人間と呼ばれるほうがましである。

部屋の中のものが壊されることに恐怖を覚える。例えば、日曜日に榎本なごみから貰った腕時計、これが壊れることを考えただけで、私の胸はまるで悪い相手に恋しているかのように締め付けられる。実際、昼寝中に、何者かに腕時計を壊されるという夢を見た。それがあまりに恐ろしかったので、ショックで目を覚ましてしまった。目覚めると窓の外に猿がいた。ずいぶん前に動物園を逃げ出した猿のように見えた。というか、ここに猿がいる理由で最も納得できるものがそれだった。窓を開けて追い出そうとすると、猿が喋った。

「あなた、お暇そうですね。退屈な生活、大変結構。羨ましいものです」きっと夢に違いなかった。

それから、いつ目覚めたのか、自分でも分からないが、とにかく晩になった。晩餐にいつものようにキノコが入っていたので私はむさぼるようにこれを食べた。悪夢を見てしまうのも、現実ではないようなものを現実のように認識してしまうのも、私の狂いかたが足りないせいだ。私よ、もっと狂え、そしてこんな悩みなど感じない身体になってしまえ。

2011年9月1日（前書き）

※これは作者の日記ではありません。あくまで創作でありフィクションです。私は正常な人間です。

2011年9月1日

9月1日（木）

起きると、と言ってもそれまで寝ていたわけではない、だらだらと昼近くまで布団に寝転がって暇つぶしをしていたのだ、とにかく起きると、階下から母と男の声が聞こえた。情事の声などではない。私は母の浮気現場など想像したくも無かったし、大体母に浮気できるほどの魅力があるとも思っていない。とにかく、階下から母と男の声が聞こえた。男の声には聞き覚えがあった。それは毎週家に来ては母と打ち合わせをしている編集者の声だった。母と男は今度母が翻訳する本について話し合っているようだった。その詳細については、ここには書き記せない。話半分しか聞いていなかったし、もう夜になってしまった今となっては、何を言っていたのか一言も思い出すことが出来ないからだ。

それに、ちょっとした事件が起こった。母と編集者の声が途切れたと思うと、階段を上ってくる音が聞こえてきた。そのとき、二階に居たのは私だけだった、と思う。二階には私の部屋と妹の部屋と母の仕事部屋があるのだが、妹は学校へ行っているし、母はもちろん私の部屋の真下の居間に居るので、私しか居ないことは明らかだった。それなのに足音は階段を上ってくる。誰だ。きっと編集者だ。何の用があるんだ。少なくとも私に用があるわけではないだろう。母は編集者に私の存在を、私が狂っているという事実を隠しているはずだから。

ところが、足音は私の部屋の前まで来て、扉をコンコンと叩いた。「入ってますか？　入ってますよね」と言って、了解も得ずに編集者は私の部屋に入ってきた。あまりにも突然の出来事だったので私は呆然としていた。私の部屋に、見ず知らずの男が、無許可で闖入

してくるとは。何をするつもりなんだ、と訊きたかったが見知らぬ人間が怖かったので私は何も言えずにいた。すると編集者は調子付いたのか、私の机の上においてあった、榎本なごみに貰った腕時計を手に取った。「いやあ、いい腕時計だ。実にいいものだよ、これは。」

「君には勿体無い」そう言って編集者は腕時計を握りつぶした。私はしばらく、何が起こったのか分からなかった。呆然としたままの私を置いて、編集者は部屋を出て行った。後に残ったのは微かな煙草の臭いとガラクタになった腕時計だけだった。

そういえば、今日はふれあいサロンへ連れて行かれる予定の筈だったのだが、母は私に話しかけてくることは無かった。私も、別に行かなくても問題は無い、と考えていたので何も起こらなかった。とにかく、物を壊されたことだけが鮮明に頭に残っていた。

私は自分の持ち物が壊されることに恐怖を覚える。そんなことを、昨日日記に書いた。すると、それが予言であったかのようなことが起こった。これは何だ。何なんだ。私の日記には妄想を現実にする力でもあるのか。そんな気の狂ったことを考えてしまったので、今日は晩餐を貪るように食べた。キノコが混じっていたが、それも含めて貪るように食べた。もっと狂え。もっと狂って、こんな痛みなど感じないようになってしまえ、私よ。

２０１１年９月２日（前書き）

※これは作者の日記ではありません。創作です。創作に決まっています。

2011年9月2日

9月2日（金）

今、起きたところである。今が現実なのか夢の中なのか、狂っている私には判断できない。しかし机の上には壊れた腕時計が置かれている。昨日、編集者に腕時計を破壊されたことは事実のようである。いや、その事実を認識している私も夢の中にいるのかもしれない。そう考え出すと混乱してきた。だからこれ以上気にしないことにして、今日、起きているか寝ているかの間に起きた出来事をここに書く。

榎本なごみが訪ねてきた。彼女は誰に案内されるでもなく、自発的に、言い換えれば自分勝手に家に上がりこんできた。そしてそのまま階段を上って、私の部屋に入った。彼女が最初に気にしたのは壊れた時計である。「壊しちゃった？」と、榎本なごみは尋ねた。「違う、昨日母の担当編集者に壊されたのだ」と、私は真実をありのまま伝えた。「そっか」榎本なごみは怒りもしなかった。自分がプレゼントしたものが勝手に壊されたというのに。「負けちゃダメだよ。狂っちゃダメだよ」と榎本なごみは言った。何に負けるというのか、私が狂ったところで何の不都合があるのか、私には納得できなかった。しかし私が何を言い返したのか、ここで記憶が途切れているので分からない。とにかく、榎本なごみは晩餐の時間より前に帰った。それだけは覚えている。

「キノコは食べないほうがいいよ」と、どのタイミングで言われたのか思い出せないが、とにかくそう榎本なごみに言われた。「食べなくても死なないよ。死にそうになったら警察に駆け込めばいいよ」いいや、食べなかったら私は死ぬ。晩しか食事を出してもらえていないのだから。私はそんな感じの反論をした、ような気がする。そ

れに対して榎本なごみがどんな反応を返したのか、それも思い出せない。きっと昨日キノコを馬鹿食いしたせいで、記憶能力が狂ってしまっているのだろう。

今日の晩餐の内容も思い出せない。しかし、きっとキノコが入っていたのだろう。今も私は狂っているから。

２０１１年９月３日（前書き）

※この日記はフィクションです。作者は正常な人間です。こんな生活はしていません。

2011年9月3日

9月3日（土）

パソコンでインターネットに興じていると、猿脱走のニュースが再び報じられていた。未だ行方は不明なり、とのこと。ちなみにこのニュースは地域ニュースのページで見かけた。暇な私はそんなどうでもいいページすら閲覧するのである。インターネットに載っている情報などほとんどがどうでもいいものである、と言う人も時々あるが、間違ってはいないと思う。ニコニコ動画や2ちゃんねるを閲覧していると、特にそう思う。

今日が土曜日だったことを午後になってやっと思い出し、先週もそうしていたように母と兼用の自転車を駆って図書館へと向かった。そこで本を返却し、本を借り、無料の給水機で大量に水を飲んだ。家で飲む水道水は残暑のせいなのか、ぬるいのである。家で飲めるものと言えば水道水か、無許可で飲む酒くらいしか無い。ほとんどの家にあるという、冷蔵庫で冷やされた麦茶は我が家には存在しないのである。

家に帰ると母と聞き覚えのある男の会話が聞こえてきた。男の声は編集者のものだった。腕時計を壊された記憶がまだ鮮明に残っていたので、私は家には入らずに自転車をUターンさせて、本屋で立ち読みして時間を潰した。冷房が効いているとはいえ、何時間も立ちっ放しでいると、寝すぎて体力の低下した私は倒れそうになった。しかし、あの変な編集者と同時に家に居ることなどできなかった。来週から編集者が来たときはどうするべきか、私は真剣に検討する必要があった。

立ちっ放しで何時間も立ち読みしていると、腰が痛くなった。横

になっても腰の痛みは引かなかったし編集者が居たという恐怖のために胃袋が縮み上がっていたしなので、私は夜になっても晩餐を取りに部屋を出ることをしなかった。そのまま、深夜まで寝ていた。ついさっき目が覚め、腰が痛くなくなっていたので居間へと降りてみたが、やはり何の用意もされていなかった。私にキノコを食べさせなくて良いのだろうか。というか、私はどうして毎日義務のように味の無い名前も知らないキノコを食べさせられているのだろうか。改めて考えてみたが、分からなかった。不条理とはこのことだろうか。

２０１１年９月４日（前書き）

※これは作者の日記ではありません。創作です。

2011年9月4日

9月4日（日）

そういえば新学期が始まっていたのか。学校など、私とはかなり縁遠いものになってしまっているため、気づかなかった。気づく必要も無かっただろう。私がまだ正常で、学生と呼ばれる身分だった頃、新学期は……思い出したくないことに気がついた。新学期を迎える暗澹とした気分をまた味わいたくなど無い。だからこれ以上学生時代のことは思い出さないことに決めた。そして私は二度寝した。

昨日の日記には「狂」の字が一度も出てきていないことに、今読み返してみて気がついた。昨日の私は正常だっただろうか？　いや、ずっと狂っていた。狂ったままインターネットして狂ったまま図書館へ行って水をがぶ飲みして狂ったまま狂った人間に危害を与えようとたくらむ悪の担当編集に怯えて狂ったまま何時間も立ち読みしたのだ。何の実もない一日だった。きっと今日もそうだ。今日やったこととといえば、電話を取ったことくらいだ。

大雨が降っていたので、今日は外に一歩も出なかった。晴れていても用が無ければ出ないが。そして電話があった。母がいつまで経っても出なかったので私が居間に下りて受話器を取った。榎本なごみからだった。「ん。あなたが取ることは予想できていたよ」榎本なごみは預言者なのだろうか。「違うよ。ところでそっちは大丈夫？　台風近づいてるらしいけど」榎本なごみの家にも台風が近づいている、ということになるだろう。「私の家は大丈夫。住んでないから」どういうことなのか分からなかったので、私は尋ねた。「だから、住んでないから。雨とか平気なんだ」分からなかった。

珍しく母に話しかけられた。「夕飯、何か食べたいものとかある

？」冷蔵庫の中にあるもので作れるもの、と私はリクエストした。その日の夕餉は、卵とトマトを混ぜ合わせて炒めたものと、焼いたキノコが出た。私が順調にキノコを食べ続けているから、母は無視をやめたのだろうか。とにかく、私は今日もキノコを食べた。

2011年9月5日（前書き）

※この日記は架空のものであり、断じて作者の日記などではありません。

2011年9月5日

9月5日（月）

また月曜日だ。学校なんか行かなくなってかなりの週数過ごしているのに、月曜日になると憂鬱になってしまう。これは何症候群なんだろう。そして、こう感じる私は果たして正常なのか。医師は狂っていると判断するけど、私は果たして本当に狂っているんだろうか。次の通院日は明後日だ。

悪の編集者の手によって破壊された腕時計を、今日、ようやくゴミ箱に入れた。今までは壊されたまま机の上に置きっぱなしだったのだ。しかし、このゴミ箱の中身を回収してくれる人物は、この家には存在していない。

なので私はいつものように、深夜、つまり9月6日になったついさっき、一階の居間のゴミ箱に自分の部屋のゴミ箱を移し変えに行った。そうすれば、母は黙って居間のゴミ箱の中身を回収してくれるのだ。これに気づくまで、私は捨てたいもので床が埋まりそうになって困っていた。

そしてゴミをゴミ箱に移し変えていると、偶然降りてきた妹と鉢合わせた。妹は眠そうな目で、私のことなど完全にいないかのように私から視線を逸らし、水を飲んで電気を消して自室に戻っていった。私がまだ居間に残っていたのに電気を消したのだ。妹の私に対する無視の度合いは徹底している。

これから眠ろうと思うのだが、さっきまで居眠りしていたため少しも眠くない。仕方がないのでこれから図書館で借りた本でも読むことにする。野崎まどという作家の「パーフェクトフレンド」とい

う本だ。内容はまだ読んでいないので全く知らないが、私はフレンドと言う言葉に惹かれてこれを借りたのだろうか。まさか。今さら友達なんか、私には無理だ。

2011年9月6日（前書き）

※この文章は作者の日記ではありません。架空のものです。

2011年9月6日

9月7日（火）

そういえば昨日はハローワークの狂人専用窓口の私の担当者が出勤する日だった。行けばよかったのではないだろうか、と起きてからすぐに思い出し、後悔した。しかし今後悔してもどうにもならない。時間の無駄だ。しかし狂っているためやることの無い私には、無駄な時間が沢山残っている。だから思う存分後悔できるのだが、それは気分が悪い。でも後悔くらいしかやることが……などといった負のスパイラルに脳が突入してしまいそうになったので、パソコンを立ち上げた。後悔するくらいならインターネットでもやっていた方がまだ健康的だろう、と思ったのだ。しかし早速気分の悪い書き込み（ニートに対する支援などさっさと打ち切ってしまえ、といった意見）を見てしまい、さらに気分が悪くなったので読書に切り替えた。

昨日読み始めた野崎まど「パーフェクトフレンド」は、普通だった。文字は普通より大きく、なんと午前中のうちに読み終えてしまった。内容は、タイトルがそうなのだから当たり前なのだが、友情に関する話だった。狂ってしまった私などと友達になりたがる人間は、この世に存在していないだろう。もう悔しくもなんともないが。本当に、もうなんとも思っていない。

午後、午前中にやろうとして中断していたこと、つまり後悔をやっていると、窓の外に猿が現れていた。まだ動物園に戻っていないのか、などと言った感想を抱きながら、部屋から見える機会の少ない自分以外の動くものを観察していると、猿は窓を叩いた。そして「そろそろ入れてくれませんかね」と言った。何故？　と私は返した。「いや、まだ残暑が厳しいもんで」私の部屋にはエアコンが取

り付けられていて、これを利用することについて家族から咎められたことは無い。「当たらせてもらえませんかねえ、エアコンに」猿が言った。そうとしか考えられない風に、猿の口は動いていた。きっと狂っているせいで見えている幻覚だ。私はベッドに横になり、布団を被った。窓を叩く音は、しばらく続いた。

２０１１年９月７日（前書き）

※これは作者の日記ではなく、フィクションです。フィクション日記です。

2011年9月7日

9月7日（水）

気力が出ない。何かをやるのも面倒だが、何かをやらないでいると気がさらに狂ってしまいそうで、しかし何かを始めるという行為には必ずストレスがついて回るものであり、その少しのストレスで狂いが極限に達してしまいそうで、空が青くて窓を開けると風が涼しくて叫んでみても家族の誰からの反応も無く、私の狂いは進行しているようだった。

病院へ行った。病院へ行く日は、居間に下りると机の上に診察費と保険証、それから診察券と狂人者手帳が置いてある。私はこれらを持って病院へ行き、診察費以外のものは病院から帰ったら机の上において自分の部屋に戻る。すると、晩餐の時間までに何者か（恐らく家で仕事をしている母）がいつの間にか回収している。

病院では、自分に気力が沸かない事を話した。「それなら、何か趣味を見つけると良い。お金がないなら、お金のかからない趣味を」読書にもインターネットにも飽きた。何か他にやるべきことは無いのか。すると医師はこう言った。「それは自分で探しなさい」丸投げされた、と少なくとも私は感じた。丸投げされた、と私だけは感じた。私だけだろうか、この発言を丸投げと判断するのは。

家に帰り着くと、母と編集者の話し声が家の中から聞こえていた。だから私は逃げた。逃げても編集者は私の部屋に乗り込むかもしれない。そして何かを破壊するかもしれない。そう考えると編集者を家に置いたまま家を離れることがとても不安だった。しかし編集者に近づくのはもっと怖かった。

本屋で立ち読みして時間を潰して、夕方近くになってから家に戻ってみてもまだ編集者は家に居た。というか、私がこっそり家の扉を開けると、今まさに家を出ようとしていた編集者と鉢合わせた。「やあ」そう言って編集者は私の腹を殴った。私は吐きそうになった。しかし、堪えた。「お、君、吐きそうになったね。君の胃液で僕の服が汚れたら、もっと殴っていたところだったよ」と、編集者は母と話していたのと同じトーンでそう言った。私は玄関で膝から崩れ落ちた。編集者はそんな私の脇をすり抜けて帰っていった。腹の痛みはなかなか引かず、晩餐を取ることも困難だった。だから今日も何も食べなかった。まだ痛い。気力が出ないとか言っている場合じゃないくらい痛い。痛いのは嫌だ。嫌だが、狂った私にそれを拒絶する権利はあるだろうか。

2011年9月8日（前書き）

※これは作者の日記ではなく、フィクションです。作者又は主人公が完全に狂った場合、連載は終了させていただきます。ご了承の上、作品をご覧ください。

2011年9月8日

9月8日（木）

あれは何日前だったか。今日は日記を読み返すのが面倒な気分なために正確に確かめることはしないが、榎本なごみは「私、住んでないから」と発言した。あれは一体どういうことなのだろう。住んでない？　ホームレスだって道端に住んでいる。ホームレスでない人間は家に住んでいる。住んでいない、とは、一体どのような状況なのだろう。などと考えていたら、榎本なごみが家に来た。母が応対しなかったので私が応対したところ、玄関先に居たのは榎本なごみだったのだ。

部屋に上がってきた榎本なごみに相談してみた。狂った人間でも仕事をすることは可能なのか。そして質問している最中、ハローワークの狂人担当窓口の私の担当者の出勤日が明日であることを思い出した。あと、榎本なごみの私の質問に対する答えはこうだった。「人間には、可能なことと不可能なことがあります。信じていれば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いませんか？　まるで人間に無限の可能性があるみたいじゃないですか」意味が分からなかったので、私はそうかと答えた。

二人揃ってもやるべきことは特に無かったので、それぞれ別の本を読書して過ごした。私はおかゆまさきという作家の本を読んだ。ものすごい文体の本だった。ものすごく、頭が悪いことを追求した文体の本だった。頭が悪い文章を書くことも、出版することも、正気ではきっとできないだろう。この作家もこの作家の作品を認めた編集者も、この本を購入した図書館も狂っているのかもしれない。私も作家にならなれるのかもしれない。「信じていれば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いませんか」榎本なごみがさっきと同

じことを口にした。

榎本なごみは夕方には家を後にした。そして夜になり、晩餐には、珍しく凝った料理が饗された。餃子である。キノコが入っているのかどうかは、中の具が細かく刻まれすぎているので分からなかった。あの狂いの原因と思われるキノコは味が無いのだ、みじん切りにされたら全く分からない。でもきっと入っていたのだろう。あのキノコを母が私に食べさせないとはとても思えない。ところで、どうして母は私にキノコを食べさせたがるのだろう。家族が狂った人間になって、何の得があるというのだろう。狂った頭ではそれを想像することができなかった。なので、考えないことにした。

２０１１年９月９日（前書き）

※これは私の日記ではなく、完全にフィクションです。

2011年9月9日

9月9日（金）

そういえば、昨日は毎週木曜日に連れて行ってもらっている筈の保健センターのふれあいサロンへ連れて行かれなかった。いつも母に連れて行かれる時間に、榎本なごみが尋ねてきて、その間母は私に一切の干渉をしてこなかった。榎本なごみが来た事を、母は承知していたのだろうか。しかし、私を無視しながら親としての義務だけは無言で果たし続ける母が、私に対してそんな態度を取るとは思えない。狂ってしまった私なんかに気遣いなどということをやるとは思えない。母は一体どうしてしまったのだろうか。

昼間、水を飲みに居間に移動すると、母と鉢合わせた。日中は翻訳作業でほとんど部屋に閉じこもっている母と偶然鉢合わせることは稀である。昨日は私を思いやってくれたような気がするので、もしかしたら無視されなくなったかもしれないと思い、私は一昨日のことを母に話した。あなたの担当編集に腹をしこたま殴られましたよ、と私は伝えたのだ。母は私を無視した。やはり昨日のことは思いやりではなく、単に連れて行くことを忘れていただけなのかもしれない。

それからハローワークへ行った。そして狂人専用窓口で私の担当者になってしまったパートタイム勤務らしい中年女性と話をした。そこで私は、狂人は作家になれるか、と尋ねてみた。「それは無理よ。狂った人間が編集者さんと打ち合わせができるとは思えないわ」と返された。そうだな、と私は思った。

晩餐にはやはり無味のキノコが出された。ここで少しキノコの描写をしておこう。いつも晩に出されるキノコは笠が大きく、赤色を

していてその中に白い斑点がある。インターネットでベニテングダケと画像検索したら出て来そうな形状と色をしている。しかし毒物を口にしたときのような反応は私の身には現れていないので、きっと違うだろう。精神に異常はきたしているけれど。

２０１１年９月１０日（前書き）

※これは作者の日記ではなくフィクションです。日記の書き手と作者とは何の関係もありません。全く関係ありません。

2011年9月10日

9月10日（土）

起きると母に久しぶりに話しかけられた。その内容は「これから取材旅行だから」というものだった。母は翻訳家である。翻訳家に取材旅行などと言うものが存在するのかしないのか、翻訳という職業に詳しくない私には分からなかった。もしかしたら旅行に行ったまま帰ってこないかもしれない、などという子供じみた想像で不安になりながら、私は母を送り出した。母が居なくなった家には、父も妹も居なかった。二人とも、私が寝ている間にどこかへ出かけて行ったらしい。

冷蔵庫を覗くとそこには冷凍食品とキノコが大量に詰め込まれていた。これらの食事で凌げ、あとキノコもちゃんと食べろ、そういうことなのだろう。キノコを食べると、私の気の狂いは加速する。しかし、食べなければならない。そう言い聞かせるような視線を、母は出かけに私に向けていた、ような気がするのである。狂っているせいでそんな被害的妄想が浮かんだだけなのかもしれないが、私はキノコをちゃんと食べることにした。食べないでいると後が怖いからである。

夜。父も妹も何の連絡も無く、帰ってこなかった。仕方が無いので冷凍食品のチャーハンを解凍し、キノコも茹でて食べた。いつぶりだろう、私が台所用品を使ったのは。狂っているくせに私は食べ終えた食器とキノコを茹でるのに使った鍋はちゃんと洗って拭いて食器棚に戻した。こんなにも正気的な行動が取れるのであれば私の狂いはやがて解消されるのかもしれない、と期待してみたが、すぐにキノコの影響が出て私は狂った。そして気がつくと、私は自分のベッドで自分に布団を巻きつけていた。狂っている間に私はどんな

行動を取ったのか、それはいつものように覚えていない。母はいつ帰ってくるのだろう。父と妹はどこへ行ったのだろう。私はこのまま死ぬまで放置されるのだろうか。こうして日記なんか書いている場合だろうか。

２０１１年９月１１日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく、完全にフィクションです。実在する人物・団体・企業とは一切の関係がありません。

2011年9月11日

9月11日（日）

朝、テレビを見ているとプリキュアが戦っていた。宮崎はプリキュアの放送地域だったろうか、と思い、見終えてから検索してみると、放送地域ではあったが放送時間は土曜日の午前中ではなかった。私が住んでいるのは本当に宮崎なのだろうか、それとも狂ったせいで自分が住んでいるのは宮崎だと思い込んでいるだけなのだろうか。一体どんな狂い方をすれば、自分が住んでいるのが宮崎だと思い込むようになるのだろうか。

私は宮崎について、思い入れも思い出したいことも一切無い。確かに私が生まれ、育ったのは宮崎で、宮崎から引っ越した記憶も無いのだが、その間に、墓の中に持って行きたい思い出は一切含まれていない。私の頭の中に入っているのは思い出したくないことばかりだ。宮崎という土地が私を責め苛んで狂わせた、と言っても過言ではないだろう、と私の狂った頭は考えている。郷土愛が無いのは狂っているせいだろう。それにしても今日は日記によく「狂う」という字が出てくる日だ。

こんな日はきっと嫌なものを見てしまうだろう、と思っていたら、窓の外に猿が現れた。猿は窓の外から家の中をじっと眺めていた。入れてもらいたそうだったので、家には現在誰も居ないことだし、思い切って窓を開けてみた。すると猿はするりと家の中に入ってきた。それから猿は居間で夕方までくつろいだ。その間、私は窓を開けっぱなしにしておいた。

去り際、猿は「あなたは正常になれますよ」と私に言葉を残した。猿が喋ることくらいで、今更驚いたりしない。何せ私はくるってい

るのだ、この猿は幻覚に違いない。猿の言葉も幻聴に違いない。私が正常になれるなんて、夢にも思っていない。自分が正常になった夢すら、一度も見たことが無い。

家族は今日も姿を見せなかった。夜、冷凍食品とキノコを食べていると電話が鳴った。榎本なごみからだった。「明日、料理を作りに行ってもいいですか」とまるで私の現在の状況を知っているかのような提案をしてきた。私は承諾した。どうせ誰も私を咎めたりしないのだ。このくらいの行動、取ったところで誰も困ったりしないだろう。

２０１１年９月１２日（前書き）

※これは作者の日記ではありません。登場する人物・団体・企業は架空のものです。団体も企業も今日の分には登場しませんが。

2011年9月12日

9月12日（月）

ゆらぎというものが人生を変えるとしたらそれはきっと傑作な幻覚であり、堂々巡りの末に出た結論としてはとても不適切とも言うことができるために日付が変わってからこの日記を書いている自分は本当は9月13日の人間なわけなんですが、どうにもこうにも腐っているような酒によっているような気がしてならない私の私の渡しの私の私の私の私の私の私の私の太くの致す所にも大腸菌が至るところに至っていたい、そう言う願いを思っていたところで不徳のいたすところだったりもするのかもしれないと考え

上の段落は、自分でも何を考えて書いてあるのか分からない。晩のキノコを食べて狂った状態で文章を書くとこのようになってしまう。だから私はキノコを食べたくない。しかし家族からはキノコを毎日食べるように、と強要に近い形で暗に言い聞かされている。だから、家族の中で最も権利のない私はキノコを食べ続けるしかないのだ。

今日も家族は帰ってこなかった。母も父も妹も、一体どこへ消えてしまったのか。警察に相談でもしてみようか、とも考えてみたが、警察に職業を聞かれたときに、私はきっと黙り込んでしまう。それが事実であるくせに、私は自分が狂った無職の人間であることを他人に話すことを恐れているのだ。生意気にも。

昼間、ハローワークへ行こうとした。しかし、自分に一体何の仕事ができるのか考えをめぐらせてみたところ、上のような文章を書いてしまうほど狂っている自分にはきっと何もできないだろう、そう思ってしまったため、私は家から出られなかった。そこを我慢す

るのが社会人というものだ、ということは頭では分かっている。しかし、体が動かないのだ。実際に無能であるくせに、無能であることを社会から指摘されることを恐れているのだ。これは狂っているとかいないとかではなく、単に私が臆病なだけである。

２０１１年９月１３日（前書き）

※この日記は架空の人物のものであり、作者の生活とは一切関係ありません。

2011年9月13日

9月13日（火）

午前中に目覚める。すると母の部屋からキーボードを叩く音が聞こえてくる。母はキーボードを押す圧が強いのだ。それにしても、取材旅行に行ったのではなかったのか。いつ帰ってきたのか。私には一言も声をかけてくれなかった。午前の早い時間に帰ってきたのだろうか。私の身に一体何が起こったのか、理解ができない。

昼、榎本なごみが訪ねてきた。人が来たのに相変わらず母は部屋から出てこない。編集者が来たときくらいしか応対しないのではないか、とすら思えてくる。それか、宅配便が届いたときくらいか。この日記を付け始めてから、家に一度も宅配便が届いていない。誰も何も、私の家に届けていない、ということになる。我が家の家族は世間から孤立しているのだろうか。それとも普通はそう言うものなのだろうか。

母は翻訳家であり、父は役所勤務の公務員であり、妹は大学生である。妹はともかく、父は母宛の贈り物がたまには届いてもいいものではないのだろうか。ということを榎本なごみに話してみると、「うーん、お歳暮なんかは届くんじゃない？　年末に期待してみたら？」と返された。榎本なごみは私より世間というものに精通しているようだ。

榎本なごみはビニール袋に食材を入れて訪ねてきた。それは何だ、と私は玄関で訪ねた。「昼ごはん、作ってあげようと思って」と言って、榎本なごみは家に上がりこみ、台所に入り込み、調理器具を勝手に使って料理を始めた。上に書いた会話は、その最中に行われたものである。

榎本なごみが作った料理は野菜炒めだった。とても簡単なもので、私でも材料さえ与えてもらえれば作れそうなものだった。しかし他人の作る料理の味は新鮮で、普通の野菜炒めとは味が違うような気がした。きっと、気がしただけだ。

私は基本、一日一食の生活を送らされている。だから、昼に食事を摂った今日は、夜になっても食欲が沸かなかった。だから私は、いつも晩餐を取る時間になっても居間に下りなかった。母は私を呼んだりすることはなかった。深夜になっても、ドアの前にキノコが置かれている、ということもなかった。ちなみに晩餐の時間の最中、床に耳をつけてみると、ここ数日姿を消していた父と妹の声も聞こえてきた。ここ数日、家族は一体どうしていたのか。訊いても答えてくれないだろう。私は家族に無視されているのだから。原因を究明しようとしても、きっと無駄だろう。私は狂っているのだから。きっと幻覚だ。狂って幻覚を見たのだ。しかし、今日は狂いの原因と思われるキノコを食べなかった。明日の私は正気でいられるだろうか。今更正気になることに、私は耐えられるだろうか。

２０１１年９月１４日（前書き）

※この日記は作者の日記ではなく、実在の人物・団体・社会とはまったく関係ありません。

2011年9月14日

9月14日（水）

昼、今日も榎本なごみが来た。昨日まで家族が消えていたことを話すと、「薬を飲み忘れたんじゃありませんか？」と言われた。しかし、私の認識している限りに於いて、病院で処方されているセルシンとドグマチールに幻覚を抑える作用は無い筈だ。家族が消えていた現象は、幻覚などでない。これは確信を持って言えるが、家族は自発的に姿を消していたのである。断じて、私が認識できなかったわけではない。と話すと、榎本なごみは首をかしげ、昼食の調理に戻った。今日も榎本なごみは昼食を作りに家に来ていたのである。そして私たちが昼食を食べ終えるまでの間、母は一度も部屋から出てくることは無かった。トイレに立つこともしなかったのである。母は榎本なごみを嫌っているのだろうか。それとも、何か理由があるのだろうか。

大体、榎本なごみはいったい何者なのか。先々週あたりから、ドンキホーテで私を付け回して以来私に構うようになっているが、私は榎本なごみのことをほとんど知らない。とりあえず何かしら知っていたほうがいいだろう、と思ったので、まずは年齢を聞いてみた。すると榎本なごみは指を口に当て、「ひみつです」と言った。きっと言えないような年齢だから言わないのだろう、と私は判断した。自信を持って言える年齢であれば、それをそのまま口にする筈だ。

今日も晩餐は取れなかった。榎本なごみの作った昼食が夜まで腹に残り続けたせいである。昨日に続いて今日もキノコを摂取しなかったことになる。このままだと、私の狂いも解消されたりするのだろうか。そんなことはない、そんな気がした。なぜなら、さっきまで私は狂っていたからだ。……さっきまで。朝の時点では、私は狂

っていなかった。夕方からついさっきの深夜にかけてまで、私は狂っていた。私の狂いには時間が関係しているのかもしれない。

２０１１年９月１５日（前書き）

※この日記は作者の日記ではなく創作であり、作られた代物です。
今、同じことを何度も書いたような気がします。

2011年9月15日

9月15日（木）

見知らぬ男に殺される夢で目が覚めた。そして目が覚めた私は、夢の中で私を殺した男が見知らぬ男ではなく、母の担当編集者であることを思い出した。いったいどうしてこんな夢を見たんだ。そんなにあの編集者のことが怖いのか。と思っていると、階下から声が聞こえてきた。それは母と編集者が居間で打ち合わせしている声だった。

話がひと段落ついたのか、母と編集者の話はいったん途絶えた。すると、これはもう「いつものように」と表現してもいいのかもしれない、階段を上ってくる音が聞こえてきた。編集者が上ってくる音だろうな、と思っていたらその通りで、編集者はまたしてもノックもせずに私の部屋の扉を開けた。今度は何を破壊するつもりなのか、そんなに私にストレスを与えて何のメリットがあるというのだろうか。愉快なんだろうか。もしそうだとしたら、私も今度やってみようか。

夢の中で見知らぬ殺人者として登場した編集者は何も壊さなかった。その代わり私に言葉をかけた。「僕は君が生きていることに価値を感じないんだよね」私も同感だったので、首を縦に振った。「狂ってるなら、薬、飲んでるんだろ」「あれ、効かないから。いくら飲んだって無駄だよ。君は気が狂った末に自殺して死ぬ。そして死体から漂う腐敗臭で、死してなお周りの人に迷惑をかけるんだ」ならば私にどうしろというのだ。「君、死ぬときは焼身自殺するんだよ。そうすれば死体の処理も楽だし、灰になるから腐敗臭もしない」まるで私が自殺することが決まっているかのような言い方だった。「決まってるじゃないか。頭狂者の末路なんか、みんな同じだ」

東京？「頭狂」それは私の知らない言葉だった。

晩餐にキノコが出た。赤く、白い斑点のある、味のないキノコを私は今日も食べなければならなかった。うどんの具として出されたのだから残すことは容易だったが、食べないでいるといつも冷たい家族の視線がさらに冷たくなりそうで、口に入れないわけにはいかなかった。これできっと、私は明日も狂うのだろう。そしてやがて焼却炉に身を投げ込むのだろう。今日、私は、編集者に頭の中を殴られた。

２０１１年９月１６日（前書き）

※これは作者の日記ではなく、創作であり、実在の人物、団体、会社名とはいっさいの関係が無いので残念だと作者は思います。

2011年9月16日

9月16日（金）

起きてから気がついたのだが、昨日、私は母にふれあいサロンに連れて行ってもらえなかった。編集者が来ていたからか。まあ、私をふれあいサロンなんかに連れていくことと仕事の打ち合わせのどちらが大切かといえば、それはもちろん仕事上の付き合いなのだろうから、仕方がないのだ。大体、私はふれあいサロンに行きたくて仕方がないわけでもないことだし。しかし一度ならず二度も休んでしまった。来週以降、行きづらい。いっそこのまま行くのをやめてしまおうか。行っても何も起こらないわけだし。

と思っていたら、母は私を呼び寄せ、車に乗せた。どこへ連れて行かれるのか尋ねてみると、保健センター、と答えが返ってきた。保健センターは毎週木曜日にふれあいサロンが開かれる施設の名前である。一日遅れの今日行ってどうするつもりなのだろう、と思って尋ねてみたが、母は舌打ちを返した。これからやりたくないことをやらなければならない、そのことを嫌がっている風だった。今日の母は感情が剥き出しだった。

保健センターの生活保健窓口に連れて行かれた。母が自分と私の名前を告げると、奥から私に数ヶ月前に狂人手帳を手渡した、私の担当者らしい人物が現れた。そして母は私の狂人手帳を担当者に手渡し、何らかの手続きを始めた。私にもなんだかよく分からない用紙が手渡され、氏名と住所の署名を求められた。そして母と担当者は生活補助金の話を少しして、窓口から立ち上がった。帰りの車に乗りながら、母は「ああ面倒くさい」と呟いた。保険金が入るから良いのではないか、と私は思ったが、「働くのとどっちが入ってくると思う?」と返された。入ってくる、というのは、家に金が入っ

てくる、ということなのか、と問い質してみると、またしても舌打ちが返ってきた。私の理解力の低さにイラついたのだろう、きっと。

あと、これはもうついでにでいいだろう、今日の晩餐にもキノコが入っていた。昨日より量が多かった気がする。

２０１１年９月１７日（前書き）

※この作品は作者の日記ではありません。実在の人物・団体・組織名とは一切の関係がありません。

2011年9月17日

9月17日（土）

今日は週末であり狂っていない人間が大挙して外に出歩いているので外へ出たくなどなかったが、借りていた図書の返却期限が来ていたので、図書館に出かけないわけにはいかなかった。外に出ることも自転車に乗ることも好きではないが、図書館は嫌いではない、人がうるさくないからだ。と思っていたのに、図書館へ到着すると、一人の狂人が暴れていた。図書の返却期限が過ぎていることを注意されたのがきっかけで、図書館員に文句をつけ始め、それがエスカレートしたらしい。私はそそくさと図書を返却して図書館を出た。そして狂人がいなくなるまで家で待機しようと思い、一旦家に帰ることにした。

家に帰ると電話がかかってきた。今日も母は電話に応対しなかった。なので私が出てみると、やはり榎本なごみからだった。母は榎本なごみからかかってくる電話を察知することができる特殊能力でも有しているのだろうか。などと考えながら、榎本なごみと少し話した。その際、頭狂というものについて知っているか、と尋ねてみた。二日前に編集者から言われた言葉だ。「すいません、知りませんねえ」と返された。謝られたのなんて何年ぶりだろう。

図書館へ戻ると狂人の姿は消えていた。まるで最初から狂人など来ていなかったかのような雰囲気だった。それが不気味でなんとなく気持ち悪かったが、本を何冊か選んで借りた。私は図書館員に文句をつけたりしなかった。そうする理由がないからだ。しかし、私は狂っているから、図書館員になんらかの因縁でもつけるべきではないだろうか、と変な義務感に少しだけ駆られた。しかし図書館を出入り禁止にされたら本を調達する手段が無くなってしまうので、

そうはしなかった。もしかしたら私はもう狂っていないのかもしれない。

そして晩、食事に混ざっていたキノコを食べると、私はあっけなく狂った。そういえば私以外の家族に饗される食事にはキノコは入っているだろうか。母に尋ねてみた。「入れるわけないじゃない、狂うわよ」どうやら母は私だけを狂わせたいらしかった。その真意は分からない。なぜならキノコを食べて狂ったからだ。

２０１１年９月１８日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく、実在の人物・団体・組織名とは一切の関係がありませんよ。

2011年9月18日

9月18日（日）

キノコを食べたくない由を母に伝えてみたところ、「馬鹿じゃないの？」と一蹴されてしまった。なぜ私は母によって狂わされ続けるのか、なぜ私は来るっていなければならないのか、それらを尋ねてみてもきっと答えてはもらえないだろう。母は私に冷たい。世界が私を貶めようとしている。

昼ごろ、母は私に「部屋を出るように」と言ってきた。何があるのかと思いきや、なんと母と編集者の会食に出席させられた。こういうことは二人きりで行うべきではないのか。それと私は編集者と顔を合わせたくない。母と編集者と私は、ファミリーレストランで昼食を摂った。母と編集者は仕事の話を交えながら和やかに話し、編集者は私がいないように振舞った。安心はしたが、母も同様だった。母も私がいないように振舞ったのだ。私はどうしてこの場に呼ばれたのか、何度も尋ねた。しかし二人は私を無視し続けた。これは何の罰なのだろう。

たった一行動だけ、会食中に母が私に干渉して来た。それは、ジップロックに入れられた刻んだキノコを、私が注文したオムライスに載せる、というものだった。食べろ、ということなのだろうか。そう尋ねてみても母も編集者も私のことを無視した。なので私はキノコごとオムライスを食べた。それから狂ったので、会食がどう終わって私と母はいつ家に戻ってきたのか、わからない。

晩餐は饗されなかった。なので夜は、本を読んでいた。図書館で借りた本の中に、「頭狂」というタイトルの本があったのだ。作者はバナナ・バナナという、国籍不明の覆面作家だった。いや、これ

は小説である、とも本には書かれていなかった。もしかしたらノンフィクションかもしれない。ちなみに訳者は母だった。

２０１１年９月１９日（前書き）

※これは作者の日記ではなく架空のものであり、実在の人物・団体・組織名とは何の関わりも持っていません。

2011年9月19日

9月19日（月）

昼間、いつものように何もやることがないので本を読んでいるとベランダにサルが現れた。私は猿の見分けがつくわけではないが、今日現れたサルは、なぜか頭が良さそうに見えた。この間サルと話したからそういう感覚に目覚めたのかもしれない。そこで私は、サルに話かけてみた。お前は本を読むか、と。「お前、とはご挨拶ですね」とサルは言った。そこで今度は丁寧語に直して、同じことを問いかけた。「読みますよ。私は本を読むサルなのです」サルは今度は答えてくれた。

動物園に戻らないのか、と私はサルに尋ねてみた。もちろん、応対してほしいので丁寧語で。「私が動物園から逃げ出したサルだと思っているのですか」私は8月に見た動物園から逃げ出したサルの映像を鮮明に覚えているわけではない。しかし、目の前にいるサルは、動物園から逃げ出したサルなのではないか、と感覚的に、そう思ったのだ。日本で野生のサルなんかそう生息していないだろうし、日本で会える野生のサルは大体が動物園から逃げ出して野生化したサルだろう。そうも思った。「もう少ししたら、動物園に戻ってやろうと考えていますよ」とサルは言った。そして何も言わずに、ベランダから出て行った。話相手のいなくなった私は、読書に戻った。

晩、いつものようにキノコが出た。この味のない赤くて白い斑点のあるキノコは一体何という種類のキノコなのか、と母に尋ねてみると、「マザーよ」と何の困難もなく答えてくれた。マザー。母。今日はなした相手はサルと母。昨日話した相手は、編集者と……いや編集者は私のことを無視し続けたから、母のみ。私の生活には母親というものが密接に関わっているような気がする。それから、こ

れからマザーという種類のキノコについて検索してみようと思う。

２０１１年９月２０日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく完全にフィクションです。そうに決まっています。

２０１１年９月２０日

９月２０日（火）

我が家には私の部屋と母の部屋にそれぞれパソコンがあって、私の部屋のパソコンは私がまだ狂っていなかったときに買ってもらったものだ。このパソコンが壊れたらきっと買い換えてなどもらえないだろう。そして一日の大部分の時間が今よりもっと空虚なものになってしまうだろう。パソコンはいずれ壊れる。ほかの電化製品より早く壊れる。私はそれを恐れている。毎日緊張しながら慎重にパソコンに触れている。

そんなパソコンが今日、異常動作を起こした。インターネットブラウザが立ち上がらなくなったのだ。これでは検索ができない。インターネットで「マザー」を検索できない。

不安。空虚。嫌な静寂。に襲われた私は、台所の冷蔵庫から酒を盗み飲んだ。そして酔った私は、自転車を駆けていた。空は曇っていた。行先は図書館だった。図書館で植物辞典を開き、「マザー」について調べるつもりだった。

しかし図書館では、植物辞典がすべて本棚から消えていた。持ち出し禁止なので貸し出し中ということはないのだが、誰かがどこかの席で開いているのだ。仕方がないので私は全然興味のない女性作家のエッセイを読みながら植物辞典が本棚に戻るのを待った。エッセイには女性の本音が書かれていてどうでもよかった。あと酔いが回っていたため内容はあまり頭に入ってこなかった。それでもどうでもよかったことが思い出せるくらいだから、相当どうでもいいことが書いてあったに違いない。

結局、閉館時間まで粘ってみても、植物辞典が本棚に戻ってくることはなかった。一体どこのどいつがこんなに大量に植物辞典を開いているんだ、と腹を立てながら、私は思った。「マザー」はキノコである。キノコは菌類だ。植物辞典に載っているのだろうか。確かめたかったが閉館時間になったので図書館から出なければならなかった。

晩餐にいつものように「マザー」が出た。食べた。夜になってもまだ酔いの余韻が残っていた。酔って狂って、私は気持ちが悪くなった。しかし吐かなかった。トイレに行ってみたが、吐けなかった。

２０１１年９月２１日（前書き）

※これは日記という形式を使って書かれていますが、作者の日記ではありません。フィクションであり嘘っぱちです。

2011年9月21日

9月21日（水）

朝、急に吐き気に襲われて、ベッドから飛び降りてトイレに飛び込んで大量の昨日から残っていた酒と胃液を吐いた。どうせなら夜に食べたキノコも吐いてしまいたかったが、ほとんど消化されてしまった白いなんだかよくわからない物体しか出てこず、キノコを吐いたという実感はなかった。現に私は今、狂っている。

昼間、病院へ行った。狂っているのを治療するため、という名目で通ってはいるが、一向に狂いが治る気配はない。今日の診察でも狂いが治る兆候は見られない、とのことだった。先生に、ブラウザが壊れてインターネットができないことを話した。他に話すべきこともなかったからだ。「じゃあ、読書でもしてたらどうだ？」と言われた。言われなくてもそうするしかなかった。「それが嫌だったら、何かお金のかからない趣味でも見つけるとか」それはインターネットで検索しなければ探し出せそうになかった。私には自由に使えるお金がない。大抵の趣味にはお金がかかる。そしてお金のかからない趣味とは何か。インターネットで探さない限り、そんなものは永久に見つからないような気がする。

帰り際、受付で紙をもらった。いつももらっているはずなのに、その紙の名前が思い出せなかった。狂いが進行しているからかもしれない、と思った。紙には「処方箋」と書かれていて、それを見てやっと紙の名前が思い出せた。この物忘れは何なんだろう。人間としての退化か。狂っているせいで変な生活を続けているため、人間として退化しているのか。

晩に、キノコの「マザー」が入ったスープが出された。私はそれ

を黙って食べた。食べ終えてから、トイレに入って、顔をトイレの穴に向けてみた。吐けそうな兆候は見られなかった。兆候、と書きたかっただけだ。

２０１１年９月２２日（前書き）

※これは作者の日記ではなく、実在の人物・団体・組織名とは何の関係もありません。

2011年9月22日

9月22日（木）

今日はふれあいサロンへ連れて行かれた。インターネットブラウザが壊れているため、他人の言葉を聞く数少ない機会となっている。私は、誰とも話さずに本を読んで過ごした。なぜなら、狂った私には他人と話す技術がないからである。しかし、私以外のふれあいサロンへ来ている狂人たちは、ほとんどが他人と会話できている。それがどうしてなのか、私は狂っているので分からない。しかし他人と喋れているふれあいサロンの参加者たちも狂っている。これはどういうことなのか、私は狂っているので。

帰りの車の中で、パソコンのブラウザが壊れたことを母に伝えてみた。当然のごとく無視された。最近はあまり無視されていないので話が通じるのではないかと期待してみたが、やはり親というものは狂った子供には厳しいものなのだろうか。私は親になったことがないし、きっと今後の人生で親になれる機会も無いだろうから永久にわからない。

帰ると編集者が待ち構えていて、母と編集者が打ち合わせを始めた。私は二階の自分の部屋でじっとしていた。やがて階下から聞こえてくる言葉が止まり、誰かが階段を上ってくる足音が聞こえてきた。きっと編集者だろう、と諦め半分に予想していると、案の定編集者で、やはりノックもせずに私の部屋のドアを開けた。「パソコン、壊れたんだって」どうして知っているのか尋ねると、母から聞いた、とのことだった。「じゃあいらないね」と編集者はケーブルを引っこ抜いてテーブルから落とした。私の部屋の床には、腕時計を壊された時とは比較にならないほど大量の残骸が散らばった。編集者は片づけもせずに部屋を出て行った。

晩餐の席で、母に「そろそろ部屋を掃除しなさい」と言われた。私はいつものように食事に混ざっていたキノコを食べた。そして狂った。部屋の掃除どころではなくなった。

２０１１年９月２３日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく、実在の人物・団体・菌類とは何の関係もありません。

２０１１年９月２３日

９月２３日（金）

榎本なごみが久々にやってきた。いつものように、母が仕事のため部屋に閉じこもっている時間を狙い絞るように。そして榎本なごみはノートパソコンを持ってきていた。神かもしれない、と私は思った。もしくは天使か。そうでなければ不審者だ。ストーカーという考えも思いついた。しかしどうして私のパソコンが破壊されたことを予知したようにパソコンを持ってきたのか、と私は榎本なごみに直接尋ねた。「あなたのパソコン、旧式でしたから。可哀そうになって、買って来ちゃいました」買って来ちゃいました、で買えるような金額のものではないだろう。「私、お金持ちなんですよ」そう言うと榎本なごみはにっこりとほほ笑んだ。私は一つの可能性を頭に浮かべてみた。榎本なごみと編集者が結託している、という可能性だ。

早速ノートパソコンを、かろうじて無事だった電源とＬＡＮケーブルにつなぎ、セットアップＣＤを使ってインターネットに繋ぎ、「マザー」という名のキノコについて検索する。これをすべて、榎本なごみと二人でやった。その結果、何も出てこなかった。インターネットの世界には「マザー」というキノコは存在しないらしいのだ。「お母さんが嘘をついたんじゃありませんか？　あの人、あなたの味方じゃないみたいですから」そうか。ところで榎本なごみは母と顔を合わせたことも無い筈である。「あなたからお話を伺う限りでは、そういう気がしてなりません」そう言うと榎本なごみは憤慨したような表情を作った。ものを貰っておきながら、私は失礼なことに榎本なごみに疑念を抱いた。

部屋の破壊されたパソコンの残骸は、未だにそのままにしてある。

ごみ箱に突っ込もうと思ったが、デスクトップのモニターが分厚いパソコンだったので、入りきらなかったのだ。

それから、榎本なごみが帰ってから母によって出された晩餐にはいつものようにキノコが出た。昨日と同じく、食べた後は狂ってしまって片づけるどころではなかった。しかしインターネットくらいはできた。狂っていてもできるのだ、インターネットというものは。キノコ、マザー、という検索ワードの間に、サル、という思いつきの言葉を挟んでみた。すると一件ヒットした。「隠しページにようこそ」とそのページの頭には書いてあった。キノコ関連で隠すようなことがどこにあるのか、と私は思った。

２０１１年９月２４日（前書き）

※この作品は作者の日記ではありません。フィクションです。

2011年9月24日

9月24日（土）

家族が動物園へ行った。私は家にいた。特に動物園に行きたかったわけではないし、動物園に行きたいか、と尋ねられたわけでもない。それでも家族が私を置いて動物園に行ったことは分かった。部屋でインターネットをやっていると、階下から家族の会話が聞こえてきたのだ。その話の断片をつないでみると、これから自分たちだけで動物園に行く、上にいる穀潰しには伝えなくてもいいだろう、放っておこう、という内容の会話だった。その間の戸締りをどうするつもりなのかについては、何も聞こえてこなかった。私に家から出ないよう言わなくてよかったのだろうか。とにかく、家族は動物園に行った。私を置いて動物園に、恐らく遊びに行った。遊び以外の目的で動物園に行く理由が分からなかったから、そう思ったのだ。

これはチャンスだった。私は編集者に破壊されてからずっと部屋に残っていてごみ箱にも入りきらないので捨てられないパソコンの残骸を、家族がいない隙に一階のごみ箱に捨てることにした。少しずつ分解して自分のごみ箱に入れ、下のごみ箱まで持って行ってこれを映す。これを数度繰り返すと、下のごみ箱もいっぱいになり、私のごみ箱にもその余りが出た。自分のごみ箱に残った余りの残骸については、後日どうにかすることにしよう。

インターネットでもう一度キノコ「マザー」について調べてみることにした。昨日と同じく「キノコ　サル　マザー」で検索して昨日の晩に見たページを見てみた。そこによると、このキノコを食べて自失した人がいる、このキノコを食べて動物と話せるように錯覚した人がいる、このキノコを食べて以来狂人として暮らしている人がいる、という、死にはしないが恐ろしい毒をもったキノコである、

と書いてあった。現在は絶滅している、とも書いてあった。

じゃあ、このキノコはなんだろう、と晩餐に出されたキノコについて私は思った。晩餐は母が帰り際に買ってきたほっともっとの弁当だった。そのご飯に、無理やり味のないキノコが混ぜ込んであった。このキノコの名前はマザーで本当に合っているのか、と母に確認をとってみた。「マザーで合ってる」と母は答えた。しかしインターネットで調べたらマザーというキノコは絶滅している、と私はどの方向にか分からないがとにかく念を押してみた。すると母は「あんたの分のプロバイダ、解約しておいたほうがいいわね」と言い出した。それは勘弁してください、二度と調べないから、と私は母に頼み込んだ。

２０１１年９月２５日（前書き）

※これは作者の日記ではなくフィクションですよフィクション。

2011年9月25日

9月25日（日）

早朝、私は誰も起きないうちに一階に下りて、冷蔵庫から酒を盗み飲んだ。日曜日の私にはやることがなく、やることのない私は酒に狂って眠っておくくらいしか世間への迷惑をかけずに過ごす方法がないのだ。もちろん、世間への迷惑とかのくだりからあとは後付けのきれいごとである。狂った私に世間への迷惑がどうのこうの、そんなことをとっさに考える能力などない。

午後、そろそろ読書にも飽きてきたころ、猛烈に酒が飲みたくなった。アルコールというものは中毒症状があるのかもしれない。そういう点に於いてはおくすりと同じようなものなのかもしれない。そう思った私は、台所へと向かおうと何回か思ったが、今は昼だし、家族がいる可能性がある。家族の目の前で酒を盗み飲むことは、さすがに狂った私でもできない。なので私は必死で我慢した。手が震え、厚くもないのに汗が出た。酒はやめておいたほうがいい、と私は思った。

夜。晩餐に於いて、食事を前にした私は、食前酒を飲んでもいいか、と許可を取ろうとしてみた。もちろん許可は下りなかった。「あんた、酒にまで狂うつもり？」とすら言われてしまった。キノコを食べさせて狂わせているのはお前だろう、と言い返したくなったが、酒に狂っているのは事実だし、私の発言権はこの家では猛烈に小さいのだから言わないでおいた。酒に振り回された一日だった。

２０１１年９月２６日（前書き）

※この作品はフィクションであり、作者の日記などでは断じてありません。断じて。

2011年9月26日

9月26日（月）

キノコを食べた直後はあまりにもあまりな状態に陥るので自分でも狂いすぎているのがわかるから、その時間に日記は書かないのだが、それ以外の時間である現在、日記を書いている私は、どの程度狂っているのか、自分ではわからない。狂っていることだけは自覚できるのだが、その度合いが分からないのだ。だから、この日記に書いてあることも、どの程度真実なのか分からない。私の主観で変なものが見えていて、それが幻覚だと気づかないまま日記に書いてしまっているかもしれない。家族は私が狂うより前から居たのは分かっているが、榎本なごみも、サルも、私に危害を加える編集者も、実在しているという証拠は私の中にしかないのだ。狂っている私の中にしか。

もう調べないと母と口約束したにもかかわらず、キノコの「マザー」が気にかかった。絶滅したとネットには書いてあったキノコをどうして母が持っているのか。図書館へ行って調べようとしてみた。しかし月曜日だったので閉館日だった。東京には月曜日でも開館している図書館が存在するらしい。東京がうらやましい。宮崎が疎ましい。

晩餐の直前、酒の発作が来た。体が急に酒を欲しがったのである。しかし盗み飲める時間ではなかったので、我慢するしかなかった。我慢しながら味のないキノコの入った晩餐を黙って食べた。この症状がとても嫌だ。酒の発作が起こると気分が悪くなる。しかも吐き気が伴わない。つまり、食べると狂うキノコを吐くことができないのである。苦しい。

２０１１年９月２７日（前書き）

※この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もございません。ございませんとも。

2011年9月27日

9月27日（火）

今日は狭間の日だ、なんてことを思った。今日は何も起こらなかったからだ。こんな日の日記には何を書けばいいのか、なんだか悩むが、読むのは自分しかいないのだから、「今日は何事もなかった」と書けばいいのではないか。でもそんなことを一度やってしまうと、明日からも日記が一行で終わってしまう日が続いてしまう気がする。だからこうしてだらだらとわざわざ「今日は何事もなかった」を引き延ばしている。

少し考え事をしてみた。榎本なごみとは何者なのだろう。嫌いではない、私を邪険に扱わないからだ。むしろ構ってくれてうれしい。しかし何者なのだろう。何らかの形で調べられるのなら調べたい。しかしネットで検索してもわかるわけがないだろうし、じゃあハローページ？　うちにハローページなんてあっただろうか。探してみたが見つからなかった。

晩餐の席で、母に何気なく尋ねてみた。最近は何があったのか知らないが、母は普通に言葉を交わしてくれる。いつものように味のないキノコを口に入れながら、母に尋ねてみた。編集者の名前は、一体なんというのか。「榎本なごみっていう名前よ」母は親切にも編集者の下の名前まで教えてくれた。しかし編集者と榎本なごみの名前が一緒だと日記に書いていて混乱するので、というか現在私は混乱しているので、これからも編集者のことは編集者と表記することにする。それにしても、二つの意味で何者なんだ、榎本なごみは。

２０１１年９月２８日（前書き）

※この話は作者の日記ではなくフィクションです。虚構です。

2011年9月28日

9月28日（水）

二週間に一度は水曜日に病院へ行かなければならないのだが、今週は通院の週ではないので今日は家にいた。ずっと家にいた。家から一歩も出なかった。昨日も一歩も出なかった気がする。こんな生活を続けていても太ったりしないのは、母が晩しか食事を出してくれないおかげなのだろう。感謝すべきか。

昼間、榎本なごみが家に来た。編集者のほうではなく、私に親切なほうである。この親切に私は甘えているのだろう。こう書くことにすごく抵抗があるが、私は榎本なごみの親切に甘えている。もうすぐ依存になるだろう。私は依存しやすい性格をしている、と自覚しているから。

そんな榎本なごみは私に行った。「外を歩いてみようよ。血行が良くなって精神的にも健康的になれるよ」その提案を、私は渋った。家から出て、幼少期からずっと過ごし続けている近所の風景を眺めながら歩き回るなんて、考えただけでうんざりする。「やってみようよ、一歩踏み出せば結構行けるもんだよ」私は榎本なごみに礼を言いたくなった。こんなにも私のことを考えてくれる人物なんて、きっと今現在のところ榎本なごみただ一人だろう。私は彼女に頭を下げて、彼女の提案を断った。「そっか」と榎本なごみは「いつでもいいから、いつかやってみてね。ウォーキング」と言い残して、彼女は去っていった。

晩餐の席で、母に東京に行きたいと言ってみた。すると母は私を無視した。さすがにこの頼み事は都合が良すぎる。私は動物園に連れて行かれない程度には、家族に冷たくあしらわれているのである。

大体今から東京に引っ越すとなると、福祉の面倒な手続きをもう一度やらなければならない。それでも、旅行で行ってみるくらいはできないだろうかと、私は醜く食い下がった。母は私に「キノコを食べなさい」と言った。

２０１１年９月２９日（前書き）

※この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。
もうすぐ十月ですね。でも何の関係もありません。

2011年9月29日

9月29日（木）

今日はふれあいサロンに連れて行かれた。そこでは、最近働き始めたことを自慢げに話している人物がいた。その仕事の内容とは、ビル清掃のアルバイトらしかった。サロンに集まった人々から、口々に「すごい」「すごい」と言われていた。ふれあいサロンに通うような狂人たちはまともに働くことをとても困難なことと設定している。私だってそうだ。だから自慢げに話していた人物は、私より立派なのだろう。私より年上だし。私より太っているし。

その人物に気力を大量に使って話しかけて、オセロ（ふれあいサロンには数種の盤ゲームが常備されている。暇つぶしのためなのだろう）をやってみた。負けた。オセロの勝ち方とは、角の隣の位置に自分の色の意志を置かないことと、相手に自分の色を囲ませるようにさせることだと、インターネットで見たことがある。その人物もその勝利法を知っているらしい石の置き方をしていた。

晩に家に帰り、いつもの味のないキノコが入った晩餐が終わった後、待望の吐き気が襲ってきたのでトイレに入ってみた。しかし吐き気はこみあげてくるのになかなか吐けなかった。私にはこの吐き気の原因が分からなかった。これを書いている今も、気持ち悪さは続いている。数分おきに込み上げてくる。でも吐けない。この気持ち悪さが続く限り、私は歯を磨くことができない。食べ物と箸以外のものを口の奥に突っ込むとえづいてしまうからだ。だから今の私の口の中は非常に不潔である。

２０１１年９月３０日（前書き）

※この物語はフィクションであり、事実・実在・実存などとは何の関係もありません。

２０１１年９月３０日

９月３０日（金）

一昨日榎本なごみに言われたことをずっと気にしていたわけではないが、忘れる理由がなかったので忘れなかった。なので私はそれを忘れるために、というかやさしくしてくれる人の言いつけを守るために、一人でウォーキングに出た。ネットでも吐き気というものは胃の血行が悪くなっているせいだと書いてあった。最近、常に腹の底で吐き気が渦巻いているので、少しでも歩くことでこの症状が改善されないか、と期待して私は近所を歩きに出たのだ。でも晩餐後のキノコを吐くための吐き気は必要だと思っている。

近所の情景は見れば見るほどうんざりした。何も思い出というものがないからだ。幼少期、私には友達がいた。今は狂っている私にも、子供のころは友達というものが存在していたのだ。ただ、中学校に入学するとともにここに引っ越してから、私は友達が作れない体質になっていた。転校を機に人見知りになったのかもしれない。それとも幼少期の友達は、親同士が仲が良かったからそれに影響されるように付き合っていた友達だったのか。新しく引っ越した先で、母は友達を作らなかった。ずっと部屋にこもって翻訳作業に精を出している。いや、子供が中学に入ってから親同士が仲がいいからと言って友達になったりする相手なんかできるものだろうか。そんなわけないな。歩いているとそんな考えが次々と浮かんできて、私の気は沈んだ。ついでに吐き気も沈んだ。

晩餐後、母は誰かと電話していた。きっと編集者だろう。電話口で時折「榎本さん」と言っていたから。母と編集者は友達と呼べる関係を築いているのだろうか。そんなわけないだろう、きっと。仕事相手に友情を感じるなどということは、多分、無いと思う。私が

仕事をやっていた時も、そうだったからそう思ったのだ。ところで私と榎本なごみは友達だろうか。これは違う、とはっきり断言できる。何故なら、私は榎本なごみに対して何もやっていないからだ。友達というものは何かをやったりやり返したりするものだ、と私は知っている。

2011年10月1日（前書き）

※これは作者の日記ではなく、フィクションです。

2011年10月1日

10月1日（土）

今日は朝に目が覚めたのだが、起きると寒かった。冷たい空気を大きく吸い込むと、吐き気がこみ上げてきた。私の胃は弱くなっているのかもしれない。何が原因なんだろう、最近飲んだ酒のせいだろうか、と思いながらトイレに行って、便座に向けて腰を曲げてみた。しかし吐けなかった。昨晩飲んだキノコもとっくに消化してしまっているだろうし、今更吐いたって胃液しかでないだろうことは分かっていた。それでも吐き気は引かなかった。

昼ごろ、屋内が暖かくなるとともに、吐き気は引いて行った。と同時に、榎本なごみが訪ねてきた。そしていつものように私と榎本なごみは居間に入ったのだが、そこへいつもは榎本なごみが来ている間は部屋でずっと仕事をしている母が部屋から出て、居間に入ってきて、榎本なごみと顔を合わせた。初対面である。初対面のはずである。母は榎本なごみに向かって、「あら、榎本さん、来てたんですね」と言って、水を飲んで部屋に戻っていった。私は榎本なごみに、何も訊ねなかった。怖かったから何も訊ねなかった。あの編集者と榎本なごみが何らかの関係性を持っているかもしれないことを、想像するだけで恐ろしかった。恐ろしさのあまり、私は今日榎本なごみと話した内容を忘れた。今思い出そうとしても思い出せない。

それなのに、母は晩餐の席で言った。「榎本さんがあんたを訪ねるなんて、珍しいわね」と。私はきっと狂っているのだ、だから母がそんなことを言っているように聞こえるのだ。私はそう決めつけて、晩餐に混ざっていたキノコを掻き込むように口に入れた。そして飲み込んだ。そして部屋に戻って狂ってそれが少し正気に戻って、

今これを書いているのだが、本当に何者なんだ、榎本なごみという少女は。榎本なごみという編集者は。

２０１１年１０月２日（前書き）

※これは作者の日記ではなくフィクションであり、登場する人物・団体・風景は架空のものです。

2011年10月2日

10月2日（日）

朝、早く目覚めたので一階の居間で朝のアニメを見ていた。見たくて見ていたわけではなく、今日も始まるであろう退屈な一日の時間を潰すために見ていたのだ。こう書くと言い訳臭くなって嫌だが、事実である。それでアニメを見ていると、妹が一回に下りてきた。テレビの音がうるさくて目が覚めたのかと思っていると、妹は私の傍らからリモコンを取り上げ、電源ボタンを押した。すると朝の一週間を振り返る系のニュース番組が始まった。何が起こったのか、私には理解が及ばなかった。なので、きっと私が狂っているせいでこんなことになっているのだろう、と強引に自分の中で納得することにした。

吐き気が昼になっても収まらないので、仕方なく歩きに出た。見たくもない近所の風景から少しでも離れるため、少しだけ遠出をすることにした。と言っても前回より少し長い距離歩くだけである。家から40分近く（時計も携帯も持っていないので体感時間）歩くと、私がかつて通っていた高校の前に到着した。その高校の校舎の中に、榎本なごみと言えなくもない影を見かけた。ような気がする。しかし今朝のテレビのこともあるから、これも私の狂いが見せた実在ではないものだったのかもしれない。

晩餐の席で、私はテレビの電源を入れてみた。すると夕方のアニメをやっていた。母にテレビが今点いているか確認をとってみると、「ついてるわよ」と帰ってきた。じゃあ私が今朝見ていた番組は何なんだろう、という思いが頭の中を過ったが、それについて深く考えるには私は既にキノコを摂りすぎていて、頭の中が狂い始めていたのでそれは不可能だった。

２０１１年１０月３日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく、完全な純然なフィクションです。

2011年10月3日

10月3日（月）

危うく一日日記を飛ばしそうになったことをきっかけに、日記を書き始めた当初の日記を読み返してみた。すると、今より長く書いていることに気が付いた。私は今、日記を書くことを面倒くさがっているのか。他にやることもない癖に。それとも狂っているのが進行しているせいで書ける文章量が減っているのか。そんなわけがないだろう。何でもかんでも狂っているせいにするのはよくない。こんなことを考えてしまうのは私が狂っているせいだろうか。

昼間、榎本なごみが来た。学校はいいのか、と尋ねてみた。すると榎本なごみは、「私、学校行ってないよ。あなたと同じところがあるから」と言った。一昨日高校の校舎内で見た榎本なごみは幻だったのか、それとも私の見間違いだったのか、そもそも榎本なごみは私に対してため口を使うほどフランクな性格をしていたのか。何もかもが思い出せなかったのは私が狂っているせいだろう。いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。それともこんなことを考えてしまうのは私が狂っているせいだろうか、いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。

何もかも狂っているせいにするのはよくない。だから晩餐に今日もキノコが出たが、それを食べなければならないと考えてしまうのも自分が狂っているせいだと考えるのはよくない、と思い、普通に食べた。するといつものように食後に大きな狂いがやってきて、意識が飛んだ。意識が飛んでいる間、自分が何をやっていたのか全く思い出せない。これは私が狂っているせいだろうか。いや……

２０１１年１０月４日（前書き）

※この日記は作者の現実とは一切の関係がなくフィクションです。
すべて想像であり、作者の頭の中の出来事であります。

2011年10月4日

10月4日（火）

昨日、榎本なごみが来ていた。その際、キノコ「マザー」について調べてもらうよう頼めばよかったのではないか、と昼前に起きた私はぼんやりとした頭でそう思った。自分で調べることは母に禁じられているなら、他人を使えばいいのではないか。しかし、こんなにも榎本なごみに依存するように頼るのは、いつか榎本なごみが家に来なくなったときにつらくなってしまうから控えるべきではないのか。このうっかり気を抜くと依存してしまう癖は、私が狂っているから出てくるのだろう、いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。このフレーズは昨日の日記に異様なほどの回数登場している。昨日の私には何があったのだろう。

昨日の私は今日の私より狂っていたような気がする。まず、吐き気がすごかった。ほとんどの思考が吐き気に持って行かれており、まともな想いというものが浮かんでこなかった。そんな気がする。しかし、それは狂っていたと言うのだろうか。単に体調が悪かったせいではないのか。

吐き気がずっと体を襲っていた原因は明らかである。飲酒が原因である。ここ数日、私は日記には書いていないがほぼ断続的ともいえるタイミングで、家族の目を盗んで冷蔵庫から酒を盗み飲んでいた。酒は恐ろしい。一度飲み始めると抜けてきたころに再び飲みたくなってくるし、寄っている間は驚くほど退屈な時間が早く飛び、つまり便利すぎるのだ。もし飲みすぎると吐き気がするという副作用がなかったら、私は永久に酒を飲み続けて、狂っていること以外の理由で入院していたことだろう。アル中とかで。しかし、狂っている私を母は、いや家族は金のかかる入院などというものをさせて

くれるだろうか。いくら福祉で親の財布に金が入っているとはいえ、入院するとその分の金など吹っ飛んでしまう。アル中で入院しても、狂人用の生活補助は適応されないのである。

今日は今日のことをほとんど書いていない気がする。しかし、こんな日もあるものだ。今日は昼前起きて二度寝し、夕方の前に起きて二度寝し、キノコ入りの晩餐を食べて狂って意識が飛んだ。私は今日は何回寝ているだろう。こんなものは生活とは呼べない。だから今日は私は生活していない。だから今日は日記なんか書くべきではなかったのではないだろうか？　起こったことと言えば、母に「マザー」について自力で調べることを許可してもらおうと晩餐の席で頼み込んでにべもなく却下されたことくらいだ。

2011年10月5日（前書き）

※この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。

2011年10月5日

10月5日（水）

今日は通院日なので病院へ行った。ちなみに、病院代は病院へ向かう前に母に手渡される。余分な金額は一切ない。自動販売機で水を買うことすらできず、私は病院へ行って40分待たされて5分の診察を終えて処方箋を貰って家に帰る。今日もそうだった。しかし、その帰り道、私はいつもと違うことを思った。今日はまだ帰りたくない、と思ったのだ。

今日は家に編集者が来ているかもしれない、そんな気がした。大体編集者が来るのは水曜日か木曜日だ。そして編集者が家に来ると、母との打ち合わせを終えた後、私に何らかの危害を加えていく。それは嫌だ。避けたい。だから私は帰りたくなかった。編集者が家を出るまで、自分が家の外で時間を潰しておこう。そう思った。

私は歩いた。他に何もできなかったからだ。自動販売機で水を買う金額すら残っていなかった。薬局による前に薬を受け取らずに薬代を使ってしまえばよかった、ということに気づいたのは、薬局で会計を済ませた後だった。遅かった。狂っているから頭の回転が鈍くなっているのだ。だから私は歩くしかなかった。見飽きた病院から家への道を、行ったり戻ったり曲がったり曲がらなかったりしながらただひたすら歩き続けた。すると民家の塀の上を四足で歩くサルを見かけた。

サルは私を見つけると、提案した。「そろそろ動物園に帰ろうと思うのですが、どうでしょう、私に何か筆記用具を貸していただけませんかね？」私はサルの見分けがつくほどサルに詳しくないので、それが何度か家のベランダに現れたサルなのかそうでないのか判別

できなかったが、こうして人間の言葉でなれなれしく話しかけてくるのだから、きっといつものサルだろう、と判断した。そして私は訊ねた。どうして筆記用具を借りたいのか。「小説というものを、書いてみたいんですよ」それなら動物園で飼育員に人間の言葉で話しかければいいのではないだろうか。ものを書くサル。きっと動物園の新しい売りになるだろう。「それができれば、いいんですがね。あなた以外に、話が通じないんですよ」文脈が通じないのか、言葉が通じないのか、私にはわからなかった。しかし分かることは一つだけあった。私の言葉は人間には伝わらない。

病院で、私の言葉は医師に伝わらなかった。診察が始まると、医師は「最近、なにか変ったことはあった?」とフランクに話しかけてきた。私は自分なりに精いっぱいの言葉を使って、最近あったことを話した。すると医師は、「そうですか。じゃあお薬出しておきますんで」と私を診察室から追い出した。私の話は他人には通じていない。榎本なごみや編集者は私の妄想の産物かもしれないのでわからない。

だから筆記用具は貸せない、と言うと、サルは去っていった。サルは動物園に帰るのだろうか。疲れたので続きは明日書く。

2011年10月6日（前書き）

※この日記は作者の創作であり、フィクションです。同じ意味の言葉を二度繰り返すほどフィクションです。

2011年10月6日

10月6日（木）

昨日の続きから書く。夕方になってサルと別れて家に帰ると、部屋が荒らされていた。今日は編集者が来ていたのか、と母に尋ねてみると、来ていた、と答えが返ってきた。どうして私の部屋を荒らしていたのに、きっとここまで荒らすと大きな音が立っただろうに、どうして止めなかったんだ？　と母に尋ねてみると、「じゃあ、あんた、止めてもらえるだけ働いてる？」と尋ね返された。私は何も言い返せなかったが、働いていないだけでどうしてこんな扱いを受けなければいけないんだ、と（向こうにとって）理不尽な怒りも湧いてきた。しかしそれをぶつける相手はどこにもいない。病院にもいない。

今日はふれあいサロンに連れて行かれたが、そこにも怒りをぶつけていい相手はいない。ふれあいサロンの狂人たちが、自分より立派な人間に見えた。部屋を荒らされて心が弱っていたせいもあるだろう。ふれあいサロンでは、名前を知らない一人の中年女性に「あなた、病んでますね」と言われた。病んでなければこんなところに寄り集まったりしないだろう、と思ったが、それをわざわざ伝えるのも面倒だった。

晩餐を終え、部屋に戻り、そしてようやく荒らされた部屋の片づけを始めた。どこをどう荒らされて、どこをどう片づけたのか。それを詳しく書くと、日記がとても長いものになってしまう。それは手首が痛いことだし、自分がこの惨状（これを書いている時点でまだ片づけは終わっていない）を、「荒らされていた」という文字列を見ただけで思い出せればそれでいいので、詳しくは書かない。とにかく部屋は編集者に荒らされていた。編集者、榎本なごみに荒ら

されていた。あの人物以外、わざわざ部屋に上がりこんで荒らすような人物を、私は知らない。世界中にはいくらでも居るかもしれないが、名前を知っているのはその一人だけだ。

２０１１年１０月７日（前書き）

※この作品はフィクションであり、登場する人物・団体・事件とは一切関係ございません。

2011年10月7日

10月7日（金）

ほとんどすべてが荒らされた部屋の中で、パソコンだけは無事だった。前回は編集者にパソコンを壊されたというのに、今回の編集者はどんな心変わりがあったのだろう。それとも、一度手を付けたものには二度手を付けない、などという個人的なルールでもあるんだろうか。とにかくノートパソコンは無事だった。編集者と同じ名前の、榎本なごみという人間からもらったノートパソコンだけは平気だったのだ。

パソコンを立ち上げてみると、「マザー」という文書ファイルがデスクトップに作られていた。そんなもの、作った覚えはなかった。誰かが作ったとしたら、編集者か。きっとろくなことが書いてあるわけがない。そう考えた私は、そのファイルを無視することにした。削除はしなかった。今後、読みたくなるかもしれなかったからだ。私は編集者に興味がない、わけではない。あいつは一体何なんだ、という疑問は頭の中にいつものこっている。

そんな疑問が残る頭の中の、残りの大半は吐き気に支配されていて、今日も吐いた。確か三回くらい吐いたと思う。三回のうち二回は胃液しか出なかった。残りの一回は飲んだばかりの酒が出た。部屋を荒らされるという惨事が起こったのだ、飲まずにやってなどいられなかった。でも酒のせいで胃が荒れているようで、ずっと胃もたれにも似た腹の重さが治まらない。それでも飲まずにはいられない。私は新しい死因を作っている最中なのかもしれない。狂い死になんて世の中的に認められたものではない、もっとまともな、社会的に認知されている死因を作っている最中なのかもしれない。

胃が荒れていたので晩餐を口に入れるのも一苦労だった。それでも絶食が続くと吐き気が収まらない気がしたので無理して食べた。胃が荒れているのにカレーだった。キノコはルーにみじん切りになって入っていた。それから、晩餐後、狂う前に思い切ってパソコンのデスクトップ上の「マザー」というファイルを開いてみた。「1.キノコ人間の作り方について」から始まる、長い文章が続いていたが、そこまで見たところで狂ってしまったので、残りは覚えていない。

２０１１年１０月８日（前書き）

※この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年10月8日

10月8日（土）

今日は図書館へ出かけた。母には調べるなと言われたが、私は菌類大辞典という本を探した。やはりどうしても「マザー」という名のキノコが気になったからだ。そして菌類大辞典と言う本は見つかった。誰も本棚から取り出してなどいなかった。私は索引で「マザー」を探した。存在しなかった。ページをめくって確認してみた。やはり見つけられなかった。

図書館では榎本なごみと編集者と出会った。編集者は私を視界に入れたが、さすがに人前ではやらない主義らしく、編集者は私に何の暴行もしてこなかった。榎本なごみと編集者は、仲がいい風でも家族と言って風でも険悪と言った風でもない距離感を保ったまま並んで立ち、私の前に現れた。一体何の目的があって私の前に現れるんだ、と私は私の幻覚かもしれない二人に、声に出して訊ねてみた。二人は何も答えなかった。あれは狂った頭が見せた厳格だったのかもしれない。いや、きっと厳格だったに違いない。二人は何もせず、ただ私を見て立っていたのだ。それなのに、周囲からは注目されていなかったのだ。

晩餐前に、デスクトップに知らぬ間に置かれていた「マザー」というタイトルの文書ファイルを開いてみた。それによると、「マザー」というキノコを人に摂取させ続けることで、その人間は認識を勘違いし続け、誰かに依存せずにはいられなくさせる。主に依存相手が母親になることから、子供を子離れさせたくない親が使用することがよくあるため、「マザー」と言う名がつけられている、とのことだった。しかし図書館の菌類大辞典にはそんな名前のキノコは載っていない。それに私を子離れさせないでいても、母は負担が増

える一方だろう。私のことを邪険に扱っているし、きっとこの文書に書かれていることは間違っている。それか、私の認識が間違っている。

２０１１年１０月９日（前書き）

※この作品はフィクションであり、実在する人物・事件・依存症とは何の関係もありません。もちろん作者の生活とも何の関係もありません。

2011年10月9日

10月9日（日）

いつも一階の冷蔵庫から盗み飲んでいる酒は「大八車」といって、とにかく量だけはたくさん入っている、きっとその分安くて味も大したことがないであろう日本酒である。私はこれを、いつもつまみなどというもの無しで飲んでいる。そして今日読んだ本によると、つまみ無しで酒を飲むという行為は、胃に大変な負担がかかるものらしい。私がほぼ毎日のように吐き気に悩まされているのは、日記に書かずに酒を盗み飲み続けているせいではないだろうか、そんな気がしてくる。だからこれからは、酒を盗み飲んだことも日記に書こうと思う。今日はかなりの量の酒を盗み飲んだ。飲んで酔って寝て、起きて飲んで酔って寝ている間に昼間が終わってしまうほどの量を。このまま飲み続けると、私はやはり狂い死に以外の死因で死ぬような気がしてくる。

寄っている間に図書館で借りた、文芸誌を読んだ。さまざまな作家がまるで申し合わせたかのように似たようなシチュエーションを書いていたため、これはもしかしてテーマが決められたアンソロジーだったりするのではないか、と表紙を確認してみたが、そんなことは書かれていなかった。「10年代の自意識を表現する僕らの青春文芸マガジン！」というキャッチコピーが書かれていた。青春文芸。いじめや第三者の校内暴力などで予想していたより（というか、普通のライトノベルより）楽しくない高校生活を送ることになった……というシチュエーションが、「10年代の自意識を表現する僕らの青春」ということになるのだろうか。単なる暗黒青春もののアンソロジーなんじゃないだろうか。酔った頭で、私はそんなことを考えた。

その文芸誌の中で、「猿」というただ一文字のペンネームを使っている作家が居た。これは以前道端で会ってそろそろ動物園に帰ると言っていたあのサルだろうか、などと考えてみたが、あのサルは「小説を書いてみたい」と言ったわけであり、「小説を書いている」とは言っていない。きっと偶然、サルという単語に連続して出会っただけだろう。それとも、実はこれはサルが書いているとか。もしそうだとしたら、もっとその部分を押し出してもいいのではないか。しかし「猿」というペンネームの作家につけられたキャッチコピーは「１０年代の文芸奇術師」というものだった。内容は暗黒小説ものだった。

とにかく一日中酔っていたので、晩餐も朦朧とした意識の中で食べた。そして吐いた。今、空腹だ。というか、吐いて以来眠れていない。深夜に書こうと思っていたこの日記も、実は１０日の早朝と呼べる時間に書いている。飲まないようにしないと、私は死ぬ。狂って死ぬより、きっとひどい、同情されない死に方をする。

２０１１年１０月１０日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく、フィクションです。

2011年10月10日

10月10日（月）

体育の日だったというのに寝てばかりいた。パソコンから聞こえてくるラジオで「今日は体育の日ですねー」と言っているのを聞いて、今日が体育の日であることに気が付いたくらいだ。今日は何の日、を話のネタにする人物は大抵話すことがない人物なのではないだろうか。それから何度も、横になっている間に、つまり日中の間に、「今日は体育の日ということで」などと言った台詞を耳にした。ラジオのパーソナリティはそんなに話すことがないのだろうか。それとも、こう話し始めるべし、とラジオパーソナリティ入門書にでも書いてあるのだろうか。入門書通りの言動を行うのがプロのラジオパーソナリティと言えるのだろうか。どうでもいい。そんなことよりこのところずっと続いている飲酒癖を止めるべきだ。狂うより先に飲みすぎで死ぬから。

ネットで見かけたニュースの中に、サルが動物園に戻った、というものはなかった。しかし動物園のホームページを調べてみると、サルが動物園に戻ったことが明らかになった。ニュースサイトは事件の解決にはあまり興味がないようだ。

そんなサルから、電話がかかってきた。「やあ、こんにちは」と、一階の固定電話の電話口から聞こえてきたその声はサルのものだった。一体何の用でかけてきたのか。飼育係は何をしているのか。「実は私、小説を書いてみたんですよ」それで、私にどうしろというのだ。「ちょっと読んでほしいんで、メールで送りますね」私は、猿、というペンネームで活動しているらしい小説家が居ることをサルに伝えた。「ほう、それってもしかして私のことだったりするんでしょうかね。私、これまでもこっそり、飼育員の目を盗むように

小説を書いてみたことがあるんですよ。そして書き上げると、その原稿用紙がどこかへ消えているんです。もしかしたら飼育員が勝手に回収して編集者に売り込んでいるのかもしれませんね」私がいまサルと話しているというこの事実は、きっと狂いが見せた厳格に違いない。キノコが見せた幻聴に違いない。そんな気がした。

２０１１年１０月１１日（前書き）

※この作品はフィクションであり、登場する人物とかは架空のものです。

2011年10月11日

10月11日（火）

昨日はハローワークへ行きそびれた。今日は私の担当者がハローワークへ出勤していないため、言っても無駄だ。つまり今日はやることがなく、暇だ。だから歩いてみることにした。毎週木曜日に母に連れて行かれる、保健センターまで。いつもは母が車で私の運ぶのだが、歩こうと思えば歩ける距離にある。そして歩いた。息は切れていた。飲酒とだらけは人の体力を奪うものだ、だからこのくらい疲れるのも無理はない。

そこで、試しに保健センターの窓口へ行ってみた。この窓口へはずいぶん前に狂人者認定手帳を手に入れるための手続きの書類を手に入れるために、それからふれあいサロンへの出席手続きを取る時に顔を出したことがある。そのときに私の担当者も決定された。綿祖が顔を出すと、少し待たされて窓口に私の担当者が顔を見せた。そこで私は相談した。自分がこれからどうすればわからない、という漠然とした相談をした。酒のせいで、そして狂いのせいで頭が回らなくなっていて困っている、とも相談した。「あー、狂ってる人はアルコール依存に陥りやすいんですよ」と言われた。「お酒をやめるには、自分の意志の力しかありませんね」とも言われた。あまり頼りにできない、私ですら頭で理解できている正論を言われただけだった。あまり実のない相談になった。

母は翻訳家であり、つまり小説に関わっている。小説を訳するのは大変なのか、と晩餐の席で質問してみた。「大変じゃない仕事なんてこの世にはないのよ」と返された。しかし昨日の電話口で、サルは楽しそうに自分が小説を書いていることを話していた。もしかしたら、小説を書くのは楽しいのかもしれない。この狂いが治った

ら、いやこの日記を書き終えて寝て起きたら、自分も少し小説を書いてみようか、と思った。世の中にはついノベルというものが存在する。ツイッターで書かれる１４０文字以内の小説だ。あのくらいなら自分でも書けるんじゃないか。なんだか今日は妙に前向きな終わり方をしている。まだ頭の中に晩餐のキノコの狂いが残っているのかもしれない。

２０１１年１０月１２日（前書き）

※この話は私の日記ではありません。フィクションです。フィクションですってば。

2011年10月12日

10月12日（水）

パソコンのメーラーを数日ぶりに開いた。どうせいつもメールマガジンや迷惑メールくらいしか送られてこないので、数日に一度しか開かないのである。すると、珍しくメールマガジンでも迷惑メールでもないメールが届いていた。件名は「件の小説」である。「件」は「くだん」と読むのだろう、きっと。こういう読みづらい読み方の感じを得意げに使うと印象を悪くしたりするのではないか、と思いながら恐る恐る開いてみると、「こんにちは、猿です」から文面が始まっていて「小説を書いてみました」と続いていて、それから長い長い小説が書かれていた。この「猿」というのは先日読んだ文芸雑誌の「猿」なのか、それとも先日道端で話してそれから動物園に帰ったサルのことなのか、どっちなのか迷ったが、小説家の「猿」だったら私のメールアドレスなど知っているはずがないし、動物園のサルだとしても私のメールアドレスなど知っているわけがない。つまりこのメールは……誰からのメールなんだ？　分からなかったが、とりあえず小説は途中まで読んだ。とても長い、本にすれば一冊分になりそうなほど長い小説だった。しかもサルのくせに人間の男と女が恋に落ちる小説だった。私はこれを読んでどうすればいいのか。感想でも返信すればいいのだろうか。とりあえず数日かけて読んで、それから考えることにした。結論の保留である。こんなことを繰り返していると、人生を駄目にする。

編集者が私の部屋を尋ねてきた。私がメールに書かれた小説を読んでいる間に、母と編集者が打ち合わせを始めていたらしい。編集者は私の肩越しに私の（榎本なごみからプレゼントされた）パソコンの画面を覗き込んだ。モニターにはいかがわしい画像は表示されていないので恥をかかずに済んだ。編集者はメールの文字を見ると、

「おお、猿先生の新作じゃないか」と言った。メールの画面はかなり下の方までスクロールしてあったので、文頭の「猿です」の文字は表示されていないのに、どうしてそんなことが分かるのか。「文章には人間が出るものなんだ。まあ、猿先生は表現が独特だから、ということもある。僕は猿先生の担当になりたくて編集者になったくらいだから、少し文章を見れば、それが猿先生の書いた文章だということが分かるんだ」と、編集者は雄弁に、しかも友好的に、私に話をしてくれた。ところで今日は私に何もしないのか、と尋ねてみると、「うん、そろそろ君のことを殺そうと思っているんだ。今はその証拠隠滅の方法を考えている最中でね、まだ思いつかないから今日は何もしないよ」と、ひどいことを言った。こんな物騒なことを平然と口にできるのは、世間知らずな中学生か編集者くらいのものだろう。「そんなことはないさ、僕は他ではこんなことは言わない。相手が君だから言うんだ」まるで私のことが好きみたいなことを編集者は言った。「君のことは、気にかけているよ。いや、気に障っている、と言った方が正確かもしれないね」そうか。私の予測できる死因に、狂い死に、急性アルコール中毒に加え、編集者による殺害が加わった。

あの編集者は悪人である。私を殺そうとしている、と、晩餐の席で母に報告してみた。「ええ、分かってるわよ、あの人がいい人じゃないことくらい。でも、私の本を作ってくれるんだから、付き合っていくしかないでしょ。私は売れっ子じゃないんだから、仕事相手を選べないのよ」母の仕事が順調ではないことを、私は今日初めて知った。

２０１１年１０月１３日（前書き）

※この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。

2011年10月13日

10月13日（木）

もう週の後半である。そんな今日はふれあいサロンの日だった。いつものように母に車で連れられてたどり着くと、そこにはいつもより若い人間が多かった、ような気がした。自分以外の狂人たちの会話から推測するに、どうも今週から新しく10代の狂人が5人も通い始めることになったらしい。若者たちの間で狂うことが流行っているのだろうか。私は数年間働いていただけの、社会的には若造ではあるが、今日から来ていた若者たちに比べれば歳をとっている。私はどう見られているのだろうか、と少しだけ気になった。しかしその私を見る目たちも狂いのフィルターを通していることにすぐに気づけたので、気にしなくなった。

ふれあいサロンでは、一人の男が大きな模造紙に大きな絵をサインペンで書いていた。まるで漫画のような、輪郭のしっかりした人物画で、それも美少女だった。どんな美少女だったかと言えば、最近本屋へ行けば平積みされている漫画本の表紙に書かれているような美少女だった。他の男が、その男に、「それ、何かのキャラクター？」と尋ねた。ため口で。「榎本なごみといいます」イラストを描いていた男は答えた。敬語で。

家に帰り、晩餐までの時間を使い、やっと猿の送ってきた小説を読み終えた。まあまあ面白かった、という感想を添えて返信してみた。そのままメーラーを閉じて、まだ開いていないので、猿からの再返信が来ているのかはまだ分からない。本当に小説家の猿先生が書いた小説だったのかもわからない。どうして猿なる者が私のメールアドレスを知っていたのかも分からない。

晩餐の席で、珍しく母から話を持ちかけられた。「知ってる？小説家の猿ってペンネームの人はね、動物園に勤務してるんですって」どうしてそんな話をするのか、私は母に訊ね返してみた。「昨日、榎本さんと話したのよ。榎本さん、猿ってペンネームの担当になりたくて、その人のことを調べてるらしいわ。でも、全然分からないらしいの」だからどうしてそんな話を私なんかにするのか、と私は再度母に尋ねた。「だって、家族の中で本読むの、あんたくらいですもの」私は父と妹の趣味を知らない。

２０１１年１０月１４日（前書き）

※この作品は私の日記ではありません。こんなこと、実際には起こり得ません。

2011年10月14日

10月14日（金）

昨日から酒を飲まないように気を付けているが、これが意外と依存していたようで、今私はとてもつらい状態にある。このままだと飲んでしまう可能性があるので、必死で日記に集中している。インターネットでの調べによると、狂った人間や不安神経症の人間は酒にアルコール依存になりやすいのだそうだ。やはりアルコールには不安を和らげる効果があるからなのだろう。病院で処方されている薬にそんな効果があればいいのだが。現在病院で処方されているエビリファイなどという効果のうっすらとした薬にはちっとも不安を和らげる効果がないように思えてならない。遅効性の薬なんだろうか。だとしたらそんな物作るべきではないんじゃないだろうか。薬が効き始める前に即効性のアルコールに手を出してしまうじゃないか。それにしても今飲みたい。今は深夜だ。家族は既に寝ている。今なら台所へ行って冷蔵庫から酒を取り出すことができる。今飲みたい。

でも結局飲んでいない。まだ狂いきっていないから我慢が出来ているのだ、と思う。完全に狂ったら、私は自制というものがきっとできなくなってしまうだろう。そして酒を盗み飲みしまくってアルコール中毒で死ぬのである。うちの家族に狂っているうえにアルコール中毒な奴を病院に入れてくれる優しさがあるとは思えない。いや、私に家族愛が向けられていないだけか。狂ってるもんな。働いてないもんな。母や父や妹は狂人に対して偏見を持っているのだろうか。私は持っていると思う。今日現在の私は、うちの家族は狂人に対して偏見を持っていると思う。

今日は珍しく二日連続でメーラーを開いた。すると小説の感想を

送った猿からの再返信が来ていた。「面白がっていただけ多様で、うれしいです」と書かれていた。どうして私なんかを相手取ってかしこまっているのだろう。私は狂っているのだ。小説なんか書く正常さも持ち合わせていないのだ。それなのに、下手に出られている。もしかしたら馬鹿にされているのかもしれない。ところでどうして私のメールアドレスを知っているのか。と、私はまたメールに書いて返信してみた。まるで猿がメル友になったかのようである。返信が来るのは明日だろう。私が次にメーラーを開くのは翌日の予定だから。

それから、電話が来た。いつものように母が出ないので、私が出てみると編集者からだった。編集者は錯乱している様子だった。「大変だ！　猿先生は猿だったんだ！」言っていることが良くわからない。それを私に伝えてどうするつもりなのか。私ではなく母にそれを報告したかったのだとしても、どうしてそうしたいのか分からない。「僕はどうすればいいんだ！　猿なんかを馬鹿みたいに尊敬しちまって！　ああ恥ずかしい！」恥らうのは個人の自由である。しかしそれを私に伝えてどうしようというのだ。本当に。あと今日もキノコを食べた。

２０１１年１０月１５日（前書き）

※この日記はフィクションであり、登場する物や人は実在のものではありません。

2011年10月15日

10月15日（土）

今日はいきなり晩餐の席での話である。たまには時系列がバラバラの日記を書きたい時だってある。私が晩餐を摂っていると、母が誰かと電話をしていた。どうやら相手は出版社の誰かであるようだった。「はい。榎本さんが？　ええ」などと心配そうなトーンで話していたので、何があったのですかと尋ねてみると、母の担当編集者が色々分け合って代わることになった、と私に教えてくれた。昨日の電話で、今日まで母の担当であった編集者は錯乱している様子だった。首にでもなったのだろうか。そこまでは教えてもらえなかった。

それにしても週末である。今週は、振り返ってみると榎本なごみが現れなかったような気がする。読み返してみればどこかで会っているような記憶が呼び起されるのかもしれないが、今週は酒に阿呆のように浸っていたという記憶の方が大きいので、榎本なごみと何らかの形で会っていたとしても、その印象が頭に残っていない。記憶を残留させない作用があるのだ、アルコールというものには。

昼間、メーラーを開いてみると、猿からの返信が届いていた。「私は珍しい天才なので、かなり大きな組織を動かすこともできます。特定の個人のメールアドレスを調べ上げることも可能なのです」とのことだった。自分のことを天才と称する人間にろくな奴はいないと決まっているものだが、相手は猿かもしれない。もしこのメールをサルが打っていたとしたら、確かにタイピングができてメール送信ができる猿など珍しい天才である。だからこのメールの内容は間違っていないかもしれない。どう返したものか分からなかったので、さらなる返信はしなかった。

晩餐の席での記憶が、今日はもう一つある。母ではなく榎本なごみが同席していた。私が食べている席の正面の椅子に、榎本なごみが座っているのだ。あなたは本当に榎本なごみか、と尋ねてみると、「ええ、そうですよ」と彼女は答えた。母はどうしたんだ、と続けて尋ねてみると、「さあ、いないみたいですけど?」と首を傾げられた。そうか。私の狂いは進行しているらしい。

2011年10月16日（前書き）

※この日記は作者の現実とは何の関わりもありません。

2011年10月16日

10月16日（日）

全てのものを一まで戻すこととゼロにまで戻すことと、どちらに価値があるのだろう？　などと言った抽象的なことを考えてしまうのは、また酒を飲んだせいだろう。ここ数日は止められていたのに、結局また飲んでしまった。これは私が狂っているとかではなく、私の意志が弱いせいだ。

幻想文学のような光景が、最近時々垣間見えている気がする。昨日など、晩餐時の記憶が二つもあるし、最近は自分脳妄想内の人物かもしれない編集者という存在と実在に違いない存在である母が電話で話している光景を目にした。このような光景を見るたびに、私は軽い恐怖を覚えている。私はもう現実には戻れないかもしれない。しかしよくよく考えてみれば、現実に戻ったからと言ってそれほど良いことが待っているわけでもない。そんな気がする。このまま狂い続けた方が人生は楽しくなるのではないだろうか。映画などで描かれる気の狂った人間は大抵楽しそうに、それが観客の恐怖を喚起するように笑っている。しかし当人は実に楽しそうに笑っている。もし今私が笑ったら、恐ろしい笑顔になるだろうか。

昨日は家に閉じこもりっぱなしだったので、今日は外に出ることにした。行先は例によって図書館である。そこで私は検索機を用いて、猿という名の作家が存在するのか調べてみた。するといくつかの本が見つかったので、本棚に取りに行った。「動物園のメリーゴーランド」というタイトルの本を探してみると、そのレーベルは小早川つばさ文庫だった。つまり児童文学だった。これがデビュー作であるらしかった。

児童文学だから読まない、などという理由はないので、借りて持って帰って読んでみた。しかしこれが意外と読みづらかった。まず文字が普通の本に比べて大きすぎる。それからすべての漢字にルビが降られているのが割と邪魔である。内容は、まあ、夢がいっぱい盛られすぎていて現実感が薄いというか。

私が一人で晩餐の席に座っていると、母と新しい担当編集者が電話で話をしていた。母は笑顔で本の内容について打ち合わせをしていた。気になるのは、母が新しい担当編集者を「榎本さん」と呼んでいたことだ。榎本という名字の社員が多い出版社なのか、それとも私が見ている光景が幻想なのか、だとしたらどこからが幻想なのか、どこまでが現実なのか。そういえば母の仕事を受け持っている出版社の名前を私はまだ知らなかったので、母に尋ねてみた。「とうきょう出版よ」と母は答えてくれた。頭狂、という単語を思い出した。それが地名だったか状態の名前だったか物体の名前だったか、聞いた覚えはあるのに思い出せなかった。もしかしたらそれをまだ知っていないのかもしれない。日記を読み返せば思い出せるのかもしれないが、結構長いこと書いてしまっているし、読み返すのが面倒だし、私が日記に書いていることがすべて真実であるとは限らないのだ。

2011年10月17日（前書き）

※この日記は作者の生活とは何の関係もありませんし、思想や経験とも何の関係もありませんってば。

2011年10月17日

10月17日（月）

月曜日なので図書館は休みである。世の中には月曜日でも休まない図書館があるという。そんな東京に行きたい、と切に思う。しかし私一人で東京に引っ越す権利も金銭も家にはない。旅行で図書館へ行っても貸し出しなど行えない。第一、図書館というものはその土地に住んでいる人間以外には基本的に貸し出さないものである。と思っていたら池袋にある図書館はどこに住んでいる人間にも図書を貸出しするらしい。憧れる。それにしても今日は図書館が休みである。昨日一日で読み終えてしまった作家の猿の「動物園のメリーゴーランド」を返却しに行くことができない。

ふと思い出し、ハローワークへ行くことにした。今日は私の担当者になってしまった不幸な中年女性の出勤日である、ということを急に思い出したのだ。しかし、特にこれと言ってやりたい仕事の目処は立っていない。それでも私は図書館へ行った。そして少し、仕事について担当者の中年女性と話した。特に実のない話を。それから、一応履歴書をもらった。しかしこれを書くとして、仕事を辞めてから現在までの空白の期間をどう書けばいいのだろう。それから、特技やアピールポイントの欄をどう書けばいいのだろう。部屋で履歴書を眺めながらそんなことを考えているうちに、自分には働く気がないことに気が付いた。ニートが身に沁みついてしまったようだ。もっと積極的に行動しなければ、さらにこの症状は悪化し、きっと狂いも加速するだろう。なので行動しよう。活動しよう。今日はもうよるなので明日から。

一応ハローワークで紹介された仕事を、覚えている限りざっと書き出してみる。ビルの清掃員。アパートの廊下の清掃員。パソコン

の文字入力。動物園の清掃員。清掃員ばかりである。狂っている人間は人と話さなくてもいい肉体労働に精を出せ、ほかに使い道なんかないからな、そういうわけなのだろうか。そうか。私は体力には自信がない。仕事をやっていた時も毎朝息切れしながら出勤していた。

ところで私は、狂う前はどんな仕事をしていただろう？　思い出そうとしてみたが、思い出すことができなかった。私の頭がおかしくなっているのか、それともともしかしたら私には働いた経験などなく、最初から（どこの？）狂っていて、自分が働いていたと錯覚しているだけなのだろうか。分からない。分からないことが日に日に増えていく。これがなくなったとき、私は完全にくるっているか、正気に戻っている。

２０１１年１０月１８日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく、実在する人物・団体・菌類とは一切の関係がありません。

2011年10月18日

10月18日（火）

もう20日が迫っている。つまり月の終盤が迫っている。そのことを考えるだけで、焦りを覚える。理由のわからない、あ、昨日に続いてまた分からないという単語が出たな、でもとにかく、この焦燥感の理由が分からない。年末が迫っているだけなのに、何を恐れているんだ、私は。まだ完全に狂っているわけではない。取り返しのつかなくなるほど無職の期間が長くなっているわけでもない。いざとなったら狂人手帳をうまく活用して生活保護を受ければいい。きっと通るだろう、手帳があるんだし。そんなことを思って安心させようとしても、心が勝手に焦ってしまう。だから今日は酒を家族の目を盗んで飲んで寝ていた。酒を飲んで寝るという行為は気絶して寝るという行為と同じものであるらしい。それがどう悪いのかはわからないが、脳細胞がたくさん死ぬとか、そんなものだろう。私の脳なんかどうでもいい。この嫌な焦りを感じる頭など半分くらい死んだほうがいい。完全に死ね、と自分に言わなくなったあたり、これは進歩だろうか。それとも家族にとって厄介な人間が生きようとしているということで、これは悪化なのかもしれない。周囲にとっての状況の悪化。私が生きているという悪い事態、である。

榎本なごみが家を訪ねてきた。手ぶらではあったが情報を持ってきた。「猿って作家、知ってる？」榎本なごみの切り出す話題はいつも私の近況を見越しているかのようだ。「あの人、本物の猿らしいよ。動物園で衆人環視の中、パソコンでタイピングして小説書いて、それを飼育係の人が印刷して出版社に持って行ってるらしいよ。そこまでするくらいならペンネームくらい公開したほうが売れると思うのに、どうして隠してるんだろ」ならばどうして、サルのペンネームが猿であることを知っているのか。「週刊誌に書いてあった

から」明日は本屋に立ち読みに行ってみることに決めた。それから、そんな情報が入ってきても、私は編集者ほどのショックは受けなかった。猿が小説を書いているから何だというのだ。完成したものがいいものであれば、それを人間が作ろうが猿が作ろうがどっちでもいいではないか。このまま知能が進化した猿に文化が乗っ取られてやがて地球は支配されるかもしれない、などという永遠のB級映画みたいな想像は浮かんだが、それは私を不安になどしなかった。そんなことが起こるとは思えなかったからだ。

榎本なごみは夜まで家にいて、しかも晩餐の席にまで同席した。母は榎本なごみの分の食事まで用意した。笑顔で。まるで息子が友達を連れていることがうれしい、かのように。普段はあんなに冷たいのに。メニューは親子丼で、私の分にはキノコが入っていた。榎本なごみの分にもキノコが入っていた。榎本なごみは言った。「このキノコ、おいしいね」私には味が感じられなかった。

２０１１年１０月１９日（前書き）

※この作品は作者の日記ではなく、純然たる創作であります。

2011年10月19日

10月19日（水）

今日は予約が入っていた日だったので病院へ行った。いつものように40分待たされた。5分間の診療の間に、この病院は待ち時間がいつも長いですね、と医師に言うと、「じゃあ警察呼ぼうか？」と返された。どう思考が飛躍したのか、一瞬理解が及ばなかったが、まあ、狂人を相手にしているのだから、隙あらば警察を呼ぶという強めのカードを切らなければならないのだろう。精神科の医師というものは大変なものだ。私はもうこの病院には行きたくない。しかし選択権がないので次回もきっと行くのだろう。

その帰りに、本屋に立ち寄り、週刊誌を読んでみると、後半のページの隅のほうに「作家『猿』は本物の猿だった！？」というスクープが掲載されていた。しかしスクープと呼ぶにはあまりにも扱いが小さかった。しかもあまり信用のおけない雑誌なので、きっとこれを鵜呑みにするのは余程の……いや、余程の馬鹿にはなれないはずの編集者という職業についている人物はこの情報を鵜呑みにしている。ということは、私が信用できないと思っているこの週刊誌の情報は、意外と正確だったりするのだろうか。

それから、週刊誌に掲載されているコラムで一本、面白いものがあった。ほかの記事はただただ人の不安を煽ったり不満をあおったりするだけのものであるのに対し、そのコラムは人間の穏やかな生活が淡々と描かれていて、人間の日常には起伏がなくてもいいのだ、と思える心強い安心感を得ることができた。そのコラムのタイトルは、柏原歌枝の獄中記、と言った。ネットの風評被害が原因で犯罪者ということになり、収監されたらしい。獄中での穏やかな生活の片隅に、自分が無実であると繰り返し紙面を通じて読者に訴えられ

ている、そんなコラムだった。面白い。

面白いコラムで気分が良くなっても飲酒は癖になってしまっているようで、帰りついたころには体中がアルコールを求めていた。しかし既に台所では母が晩餐の支度を始めており、台所に置かれている冷蔵庫から酒を盗んで飲むことは不可能に思われた。仕方がないので晩餐後まで我慢することにした。

その晩餐の席で、またしても家族以外の人間が同席した。それは中年の男で、名前を榎本なごみというらしい、母の新しい担当編集者だった。「君、先生のお子さん?」と新しい編集者は言うので、うなずくと、「君、狂っているね?」と、まるで医師のように私の症状を言い当てた。「君が作家になれば、話題になるだろうな」狂人を売りにして本を売るつもりか。世間が狂人が本を書くということに慣れたらどうなるんだ。「君に技量があれば、作家を続けられる。話題性だけの作家で終わったら、それまでだ」今までの編集者に比べて、この新しい編集者は随分と常識的だった。生活に起伏がなくなってしまうな、と私は無駄な心配をした。

２０１１年１０月２０日（前書き）

※この作品は作者の日記ではありません。が、作者はアルコール依存になりかけています。

2011年10月20日

10月20日（木）

今日はも今日日なので、母によってふれあいサロンへ連れて行かれた。抵抗するのもありか、と思ったが、それは面倒なのでやめておくことにした。現に今、こうして日記を書くのに手を動かすのも面倒くさくて仕方がない。今日はなぜか何をやるのも億劫で仕方がないのだ。

ふれあいサロンにまた新しいメンバーが来ていた。それはあの編集者だった。母を担当し、私に繰り返し暴行を与えた人物である。直接殴ったりしたわけではなかったが、あれは紛れもなく暴行だった。しかし狂って会社を辞めたからと言ってこんなにも早くふれあいサロンへ通う手続きがとれるものなのだろうか、と思っていたら、編集者は人を殴りつけた。どうやらほかの人間から声を掛けられ、その内容が気に入らなかったらしい。話しかけられた内容は聞こえなかったが、元編集者は「俺は狂ってなんかいない！」と言っていた。そんなことを言う人物こそが一番狂っているのである。自覚のある私なんかより始末に負えない。

それから編集者はふれあいサロンが内包されている保健センターの職員の手によってふれあいサロンを連れ出された。どこへ連れて行かれたのだろう、隔離棟かな、ここにそんなものあったっけ、などと考えながらふれあいサロンから出てみると、保健センターのロビーに、元編集者はおそらく担当者であろうと思われる職員と一緒に、ソファに座っていた。元編集者は何かを言われており、それを聞いている元編集者は首をうなだれていた。それからしばらく経つと、元編集者は保健センターから出て行った。来週も来るだろうか。だとしたら、迷惑なんじゃないのか。それを保健センターの職員に

尋ねてみると、「来週はおとなしくしてるって。約束しましたよ」と言った。どうやら元編集者は来週も来るらしい。迷惑なんじゃないだろうか。

サロンで本を読んでいると、急に酒が飲みたくなった。しかし保健センターに酒などない。このままではどうにかなってしまう、そう感じた私は、どうなってもしまわないはずなのに、耐えきれなくなって保健センターから外に出た。そしてその周辺をでたらめに歩いていると、比較的近くにコンビニあることを発見した。そのコンビニには酒が売ってあった。しかし私は個人的に使える金を少しも持っていなかったので、酒の缶だけを眺めていた。誰かが表れて１４８円を恵んでくれることを期待しなあが、缶酎ハイの缶を眺めていた。もちろん誰も現れず、店員に冷たい目で見られていた。様な気がする。結局私は、２時間近く缶を眺めていた。

帰るとさっそく私は家に常備されている酒を盗み飲んだ。そして酔って吐いて、私は倒れた。目覚めて晩餐を済ませても、体のだるさは取れなかった。だから私はこれを書いている現在、とてもだるい。だから今日はもうこれで日記を終わることにする。

２０１１年１０月２１日（前書き）

※この日記は作者の現実とは一切の関連性のない、架空の日記です。
もちろん主人公は作者とは違う人物です。

2011年10月21日

10月21日（金）

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんとその息子と娘とたくさんの孫たちが住んでいました。孫たちが働くのでおじいさんとおばあさんは働かずに済みました。おじいさんは山へ芝刈りに行くこともなく、おばあさんは川へ選択へ行くこともなく、孫たちは誰一人として浜辺へ行く暇もないほど一生懸命働いていたので、その家族の元には何のファンタジーも起こらなかったといいます。という昔話を思い付いた。これに少し脚色を加えれば面白くなりそうな気はするが、さてどうしたものか。

などという夢を見ているうちに私は病院で目を覚ました。昨日はキノコを口に入れていない、様な気がする。酒のせいで記憶があいまいである。キノコを口に入れていないとしたら何が原因で病院へ運び込まれたのか。酒が原因だろうか。それとも無意識のうちにキノコを口に入れ、それで狂ったせいで自分の身に何が起こったのか思い出せないでいるのだろうか。それか、今までのことは全部夢で、私は最初から入院していたのだろうか。私が日記に書き留めていたことには色々と不条理なことがあるので、それもあり得る。

病院からはその日のうちに退院させられた。医師から聞いた話によれば、私は急性アルコール中毒による二日酔いで気分が悪いと母に訴えていたらしい。母は深夜に気持ちが悪いと騒ぐ私に耐えられず、救急車を呼んだらしかった。帰ると、私は禁酒を命じられた。母の目を盗んでこっそり冷蔵庫を覗いてみると、酒は撤去されていた。これを自縄自縛というのだろうか。それとも、当たり前の処置、と言ったほうが正確だろうか。

酒がない、逃避するのに最適なものがない、そう考えるだけでイライラした。イライラするので私は本を読むころにした。本に集中している間はイライラが少しは解消されるのが救いではあったが、読み終えるとまたやることがなくなった。そこで、もう夕方になっていたが、散歩に出かけることにした。すると、犬と数回すれ違った。犬にはすべてリードと飼い主がくっつけられていた。私が子供のころは、この辺りにも野良犬が出ていたような気がするのだが、最近は少しもそんなことが起こらない。

晩餐はいつもより多めに、キノコをいつもより多めに食べた。すると満腹のせいか、いつもより狂ったせいか、私は眠ってしまった。夢は見なかった。次に起きてもまた病院にいるんじゃないか。そんな気がした。

２０１１年１０月２２日（前書き）

※これは作者の日記ではなく、創作作品です。

2011年10月22日

10月22日（土）

なんだかもうすべてが嫌になってきた。それというのも酒がないせいだ、きっとそうだ。そうでも思わなければこの無力感、脱力感に説明がつかない。そんな思い込みが頭を支配してしまっている。正直、今日は日記を書くのをやめようとすら思った。でも意地で今、書いている。体力がなくなっているわけでもないし、とても嫌なことがあったわけでもない。それでも書く気になれず、結局23日の早朝という時間にこれを書いている。

22日、起きると榎本なごみが枕元に立っていた。なぜ立っているのか尋ねてみると、私のころが急に心配になったから、らしい。どうしてそんなに私なんかに構うんだ、それとも飲酒していないせいで見えている幻覚だろうか？　「飲んでないんだね」飲んでいないと幻覚が見えるようになる症状を離脱というらしい。アルコール中毒用語である。それにしてもどうして枕元に立っているのか。そろそろはっきりさせないといけないような気がしてきたので、尋ねてみた。お前はいったい何者なのか、と。親の仕事相手に同姓同名の人間がいるが、関係があるのか。どうして私に構うのか。どこで私を知ったのか。その優しさの裏に何が控えているのか。私は複数の質問を一息に榎本なごみに伝えた。一気にそんなに応えられるわけがないのに。

矢継ぎ早の質問に、榎本なごみはたった一言答えた。「私は、当たり前の存在じゃないんだよ」一言なのに何も分からなかった。それとも、一言だったから何も分からなかったのか。その答えを言い残すと、榎本なごみは部屋から出て行った。それから私は、眠った。一日中、ずっと寝ていた。日が昇り切っても日が落ち始めても、部

屋の中で朦朧とベッドに潜っていた。

晩餐の席で母に伝えられて明らかになったのだが、榎本なごみは一日中家にいたらしい。私の家族に何を言ったわけでもなかったらしいが、榎本なごみは母に晩餐を作ってもらっていた。私の知らぬ間に。榎本なごみが何なのか知っているのか、と母に尋ねてみた。「知らない」と帰ってきた。じゃあどうして食事を饗したのか。「不思議ねえ。でも、あの娘、不思議な魅力があるのよね」魅力に対して不思議なんて言葉は適応されるものではない。私は榎本なごみが帰ってから数時間後に晩餐を食べ、それに混じっていたキノコで狂ってまた寝て、そしてついさっきまでまた寝ていた。

２０１１年１０月２３日（前書き）

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年10月23日

10月23日（日）

そんなにやることがないなら本でも読んでいればいいのに、最近は昼も夜も寝てばかりいる。こうなったらいっそのこと、このひたすら眠っているという自己の姿を現代アートとして提出してしまう、というのはどうだろう、と思いついた。ステージ上ではバンドが激しい演奏、そして老人ラッパーがライムで現代社会をディスり、お行儀のよろしくない格好をしたヒップホッパーたちがリズムを刻んで体を動かしている、そんな中心で、私は布団を敷いて眠っているのである。この異様な空間で寝るという行為。この非常識さこそが現代アートたり得るのではないか。そんな夢を見た。狂った人間の夢なんてこんなものである。

夢に出てきた老人ラッパーのディティールはかなりしっかりしていて、顔中ぼうぼうに伸びた髪の毛やもみあげや髭を編みこんで顔の8割を隠し、それでいて激しい声で……夢の話はむなしいので現実の話へ移ろうと思う。現実の話も大概むなしいものであるが。現実がむなしくない人間なんかこの世に数人しかいない気がする。つまり実は私は正常なのではないか。

現実の世界で、私は少しウォーキングを行った。寝ている間に歩いて、歩き終わって帰ってきてまた寝たのである。キノコを食べた直後眠るように狂ってしまうという状況を回避するために、寝だめ、という策を思い付いたのと、単純に眠いという二つの原因が重なってこんなことになったのである。だから私は歩いた。歩いている間は誰ともすれ違わなかったし、何の特別なことも起こらなかったので、この段落は一行で済ませていいはずなのに、こうしてだらだらと書いてしまっている。そんなに日記を書いていたいのか、私は。

じゃあ小説家にでもなればいい。きっとなれないと思うが。編集者が狂人の書いた小説を読んでくれるとは思えない。

小説といえば、今日は図書館まで歩いたことを記録し忘れていた。昨日図書館へ行かなかったので、今日行ってみよう、と思い、いつもは自転車で通る道をわざわざ時間をかけて歩いたのである。そして図書館でペンネームを猿という作家の別の小説を借りてみた。「このキノコ人間が、」という、児童文学とは明らかに方向性が違うらしい、吐き捨てるような言い方のタイトルだった。

そして晩餐後、眠らずに本を読もうとしていたのに、結局ついさっきまで意識を失っていた。またキノコを食べて狂って寝てしまっていたのだ。これを防ぐ方法はないのか。本当にないのか。

２０１１年１０月２４日（前書き）

※この作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件とは一切関係ありません。

２０１１年１０月２４日

１０月２４日（月）

午前中は寝ていた。このまま眠るように死ねたら、死にざまとしてはましなほうだ。しかし私はまだ死にたくはない。そして夢を見た。雑誌の文字が小さくて、顔を近づけている、という、非常に面白くない夢だった。どうしてこんなことを夢に見るのか。私は自分の金で雑誌を買って読む、というここ数か月実行できていない行為にあこがれを抱いているのか。それにしても夢にしては現実的すぎやしないか。そしてあまりにもつまらなくはないのか。これから雑誌に関連した何事かが起こる前触れなのか。そうとでも妄想しないとこの夢があまりにも不憫でならない。つまらなさのあまり、夢に対して感情移入してしまった。

午後、ハローワークへ行ってみた。今日は私の担当となった中年女性の担当者が出勤している曜日だからである。そこで仕事を見つけてもらおうとしたが、そこで私は弱音を吐いてみた。狂ってしまった自分が働ける自信がない、と。「やる気がない限り、働こうとしても働くなんてことできないわよ」と返されてしまった。私はきっと、現状に甘えているのだろう。現状が悪くないと、心の奥底では感じているのだろう。酒を禁じられ、金銭の所持を禁止され、やることと言えば寝るか図書館で借りた本を読むか、そんな寂しい老後のような現状に。打開したくないわけがなかった。

ハローワークからの帰り道、現状の象徴とも言い表せる榎本なごみとすれ違った。彼女は高校の制服を着ていて、二人の友達らしき同じ制服を着た人物と並んで歩いていた。私とすれ違う際、視線すら向けなかった。きっと私と知り合いであることが友達に露呈することが恥ずかしいのだろう。私だって自分が狂っていることが露呈

するのは恥ずかしい。そして働いていないことと、働く気がないことを言い当てられてしまったことが恥ずかしい。この宮崎という田舎において、働いていない人間は全員不審者である。そんな不審者たる私なんかに道端で親しげに話しかけてくる人物が表れでもしたら、まず私のほうが不審がる。きっとろくな目的ではないだろうから。

夜、それも深夜、晩餐が終わっていつものキノコのせいで気を失って目覚めてから、電話がかかってきた。出てみると、榎本なごみからだった。「今日は無視してごめんなさい」と謝罪された。榎本なごみは私に気を使いすぎなのではないだろうか。それにしてもどうしてこんなに気を使ってくれるのか。私は高校生の命を救った覚えなどないし、高校生ではない人物の命を救った覚えもない。榎本なごみは私に恩があるわけではないのだ。私が一体何をしたというのだ。不審である。

２０１１年１０月２５日（前書き）

※この作品はフィクションであり、作者の生活とは一切の関係がありません。

2011年10月25日

10月25日（火）

今は秋、それも冬の迫った秋のはずである。それなのに窓を閉じていると暑くて、暑さのあまり目を覚ましてしまった。体中汗をかいていたので、シャワーを浴びることにして、階下に降りて、浴室に入った。すると一匹のなめくじが私を出迎えた。「あ、すいませんが蛇口ひねってもらえますかね。私、手がないもんで」なめくじは温水を浴びても平気なものなのだろうか。「私のようなもんにとって水分は命の源ですからね」それから私となめくじはシャワーから放出される湯を浴びた。なめくじは、心持ち、気持ちよさそうに見えたが、なめくじに顔と呼べる部位など存在しないので、私が狂った頭で勝手にそう思っただけなのだろう。

それから、本に取り掛かった。今日は読書くらいしかやることがないのである。しかしなかなか集中できなかった。昨日の夢に雑誌が出てきたことから、体が雑誌を求めているのかもしれない。そう思ったので私は外に出て、本屋へ向かった。本屋までは家から2キロ歩かなければならなかった。秋にしては暑い気候が、喉から水分を奪ったが、私にはお金がないのだ。本屋でテレビブロスという雑誌を読んでみたが、知らない人間が充実した現状をフランクな口調で語っていたので、私はなぜか腹が立った。どうして知らない人間の日常なんか知らなければならないのだ。こんなにも人を不快にしてしまう日記および現状報告の文章をどこにも公開していない私は正しい。

晩餐を食べていると、母が塩を瓶ごと持って食卓から出ていき、すぐに戻ってきた。どうしたのか、と訊いてみると、「風呂場になめくじが出た」と帰ってきた。母はなめくじが嫌いだったのか。ま

あ、不思議なことではない。テレビでなめくじ撃退用品のＣＭをやっているのを見たこともあるし、なめくじというものは基本的に人に嫌われるものなのだろう。私と一緒だ。

２０１１年１０月２６日（前書き）

※この作品はフィクションであり、現実とは一切の関係を持ちません。

2011年10月26日

10月26日（水）

今日は病院へ行かなくてもいい水曜日である。病院へ行くのは隔週なので、今週の水曜日は自由、というわけだ。なので気が緩んだ私は午後まで眠りこけてしまったが、それは仕方のないことなのである。最近朝から晩まで寝てばかりで、ろくに図書館から借りた本を読めていない気がするので、少し気合を入れて本を読んでみることにした。猿というペンネームの作家が書いた「このキノコ人間が、」という本である。

読み進めていくにつれ、体がだるくなってきた。まるでアルコールを体に入れたときのような脱力感が襲ってきた。最近本を読まなかったせいで変な疲労感に襲われているんだろうか、と思いつつ、水を求めて台所へ行き、麦茶でも取ろうかと（これは酒と違って勝手に飲んでも怒られない）冷蔵庫を開けると、そこには缶ビールが四本ほど入っていた。たった四本なので、一本でもなくなれば確実に無くなったという事実は露呈してしまうだろう。だから私はこれを盗み飲むべきではない。

それから二十分後、私は外を歩いていた。足はふらついていた。久々にアルコールを体に入れたせいである。そして缶ビールを勝手に飲んだ私は、逃避行を開始していた。逃避行と言っても近所をふらつく程度のことしかできなかった。家に帰れなくなるほど遠くへ行ってしまうと、私はきっと餓死してしまうに違いない。そんな気がした。きっと私がいなくなっても探したりしないだろう、私に冷たい私の家族は。

逃避行は夜まで続いた。というか夜までしか続かなかった。アル

コールのせいで歩くのがつらくなって、夜には家に戻ってしまったのである。案の定、缶ビールを勝手に消費したことは母にばれており、今日は夕食を抜かれた。だから今日はあの味のない食べると気の狂うキノコは食べていない。それでも、いつも晩餐を食べ終えるころになると、いつもの癖でベッドに寝転がった。すると天井になめくじが張り付いていた。無事だったのか。「九死に一生を得ましたよ」昨日のなめくじであることが自分でもわかることが不思議だった。

２０１１年１０月２７日（前書き）

※この作品はフィクションであり、実在する人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年10月27日

10月27日（木）

今日も毎週のようにふれあいサロンへ連れて行かれた。そこには元編集者がいたが、今週はおとなしい様子だった。誰とも喋っていないし、何もしていない。まるで狂人というより廃人のようだった。一方で私も、誰とも喋らず読書をしていた。「このキノコ人間が、」の続きである。すると編集者が近寄ってきて、「そんな本読むなよ」と突っかかってきた。「猿が書いた小説だぞ」誰が書いたって小説は小説だろう。むしろ猿が書いた小説こそ、読みたがる人は多いのではないだろうか。「猿はだめだ。猿はだめだ」ならば誰が書いた小説ならいいのだろう。「絵になる人間が書いた小説だ。それが一番売れるんだ」もう編集者ではないくせに、元編集者は本の売り上げのことをぼやいていた。ところで、現在編集者はどんな生活をしているのだろう。「……妻に捨てられたよ」結婚できていたのか。あんなだったのに。ならば私も、いつか結婚できるのかもしれない。「結婚には社会性が必要だ。俺も君も、今は狂ってるんだぞ。結婚なんかできるわけないだろ」言われてみればそうだった。編集者は狂ったから結婚生活が維持できなくなったのだ。それからも編集者はぼやき続け、結局読書はあまり進まなかった。

帰ると榎本なごみが絵になるポーズで食卓に座っていた。このような人間が本を描けば、元編集者が言っていたように売れるのだろうか。本の売り上げも作者のルックスが握っているのか。だとしたら空しいものがある。しかし綿谷りさや斉藤……なんとか、とにかく元水島ヒロだった誰かが書いた小説は実際売れている。やはり元編集者の言っていたことはあながち間違いでもなさそうである。

絵になるポーズで食卓に座っていた榎本なごみは、私の家族に受

け入れられているようだった。誰も食卓に他人がいることについて何も言わないし、疑問の視線を向けることもしない。何を言って私の家族に取り入ったのだろう。家族と仲の良くない私には想像もつかない。そんな榎本なごみに、二日連続でなめくじと話したことを報告した。報告するほどのことでもないが、ほかにやったことと言えば読書とネットと睡眠のみである。「それは良くない兆候だねえ」と榎本なごみは言った。「なめくじは不吉な動物なんだよ」私はそんなことを知らなかった。しかしそれをネットで検索して確かめる気にはなれなかった。検索すれば、きっとなめくじの画像が大量に画面に表示されることだろう、一匹だけ視界に入ってくるならまだ大丈夫なのだが、一度に大量のなめくじを見るのは、少しつらいものがある。だからこの件に関しては、とりあえず心には留めておく、程度に留めておくことにした。

２０１１年１０月２８日（前書き）

※この作品はフィクションです。作者の日常とは一切の関係を持ちません。

2011年10月28日

10月28日（金）

目覚めてしばらくの間、今日が土曜日だと勘違いしていた。なぜだろう、今週は日付けがゆっくりと進んでいる気がする。病院へ行かなかった、ただそれだけのことで、体感時間の流れは緩やかになるものなのだろうか。それとも酒をほとんど飲まなかったことが原因だろうか。私は酒を飲むと眠る。なぜなら、酒を睡眠薬がわりに使っているからである。このような酒の飲み方は、きっとよくない。良くないが、私の体がいまさら故障したところで、いったい誰が心配するというのだろう。

麦茶を飲もうと冷蔵庫を開けると、麦茶が入っている大きな容器の底に一匹のなめくじが沈んでいた。これはさすがに飲んで大丈夫な代物ではないだろう、と思った私は麦茶を流しに捨てた。流しにはなめくじが残った。なめくじは私に言った。「おや、私の体液が入っていた水は飲めないと？」当たり前だろう、人間の体液入りの麦茶すら飲む気が起こらないのだ、人間以外の生き物の体液入りの麦茶など誰が飲みたがるものか。「それは残念だ。私の粘液には狂いを強制する力があるというのに」私は思わず訊き返した。

晩餐の後、キノコのせいでふらつく足を引きずって自分の部屋に戻り、机の上にスタンバイさせておいてなめくじの体をひと撫でした。するとなめくじの体の粘液が指に付着した。私はそれを舐めた。すると急に、狂ってぼやけていた世界が鮮明になった。あまりにも急に鮮明になったので、軽い恐怖すら覚えた。そして、狂いは起こらなかった。「効果覿面でしょう」なめくじは得意げな顔で（なめくじに顔と呼べる部位があるのか疑問だが）そう言った。顔はともかく、声色は得意げだった。私は、そうだな、と答え、夜を何もせ

ずに過ごした。狂わずに過ごす世界は、こんなにも退屈なのか。

２０１１年１０月２９日（前書き）

※この作品は作者の創作であり、作者の日記ではありません。

2011年10月29日

10月29日（土）

朝、起きたら文学的出来事が私を待ち受けていた。私の部屋には小学生入学時に買ってもらって今も使っている机がひと揃えあるのだが、そこになめくじがいたのだ。寝起きで出会う机の上のなめくじ。これって文学にならないだろうか。そんなもんが文学になるなら文学はもっと門戸が広いはずである。文学なめんな、と私は自分に言い聞かせた。そしてなめくじは声を発した。「何なら、私に定期的に水を供給していただくのと引き換えに、体液を好きな時に好きなだけさしあげますよ」と、それは提案だった。私は、その提案には乗らないことにした。そんな取引を交わしたら、私はなめくじの体液依存症になってしまう可能性がある。アルコール依存より響きが病的で、私はそれが嫌だった。「そうですか、それは残念ですね」そう言うと、なめくじはカタツムリが這うような速度で私の机から去っていった。私はそれをずっと見ていた。他にやることがないからだ。

相変わらず狂っていた私は、狂おしいほどにアルコールを欲していた。飲めば吐くことは明らかなのに、それでも酒が飲みたいのである。それと同時に、私は気が付いた。私は自失したいのだ。私は私でなくなりたいのだ。私は自分のことが大嫌いで、狂ってまで自分を忘れてしまいたかったのだ。と気づくと、私はなぜか泣いていた。酒が欲しすぎて悲しくなんかないのに泣いていた。悲しくない。本当に悲しくない。

昼過ぎに、チャイムの音が鳴ったので玄関の扉を開けてみた。するとそこには誰もいなかった。しかし、私が扉を開けると同時に、何かに触れられた気がした。それは人間のような温度を持っていて、

柔らかくて、それが気持ち悪かったので、私は直ちに扉を閉めた。いったい何が私に触れたのか、見えなかったのでまったくわからなかった。

晩餐の席において、私はいつものようにキノコを食べた。すると私は狂い、いつもと同じ風景が見え、それから気を失った。そして深夜に起きだして、日記を書き始めた。机の上には何もいない。なめくじもいない。なめくじは私を見捨てたのだろうか。そもそも、なめくじは私をどうしたかったのだろうか。

２０１１年１０月３０日（前書き）

※この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・建物とは一切関係ありません。

2011年10月30日

10月30日（日）

今日は八回トイレに行った。うち三回は吐くためである。気温が下がってきたせいか、胃が飲んだ水を戻そうとばかりしている。もちろん吐くものは水ばかりである。そのうち晩餐も吐くようになるのだろうか。そうなったら私は栄養失調に陥って死ぬ。でも家族にとって、それは良いことなのかもしれない。父と妹は相変わらず私を無視し続けている。

朝、起きると家族が出かけていた。家に誰もいなかったし、靴も私のものしか置かれておらず、鍵もかけられていたので、家族が私を置いて出かけたことは確実である。この前は動物園だったから今回は近所のイオンモールあたりかな、と予測を立ててみる。家の近所には、田舎らしく非常に巨大なショッピングモールがあるのだ。そのショッピングモールの周辺は田んぼが取り巻いている。田んぼの中に突如現れる近代的なショッピングモールの姿は、とても違和感がある。しかし地方のショッピングモールは巨大なものと相場が決まっているようで、千葉も埼玉も熊本もショッピングモールは大きいらしい。逆に東京のものは小さいらしい。これらはすべて、インターネットで仕入れた情報である。私の情報源は新聞とテレビとインターネットしかない。普通か。

昼ごろ、チャイムが鳴ったので私は玄関の鍵を開けた。家族はまだ帰ってきていない。扉を開けると、そこには榎本なごみが立っていた。立っているだけで入ってこない。榎本なごみは私に触れた。

「今日は、見えるんですね」榎本なごみは相変わらず口調が一定しない人物である。私の妄想の産物だからかもしれない。妄想の産物だから、設定が気分によって変わるのだ。

榎本なごみはすぐに帰り、その直後に家族が戻ってきたので、私は鍵を閉めた。勝手に鍵を開けたことが知れたら怒られるかも知れなかったからだ。母は晩に、お土産、と称して食卓に宝楽饅頭とキノコのソテーを並べた。宝楽饅頭とは東京では今川焼と称される宮崎特有の和菓子である。あんこが皮も破れよとばかりに詰め込まれているため、一個一個が重く、二個も食べれば満腹になる。それでも食卓には三個並べられていたので、私はそれを三個腹に詰め込み、さらにキノコのソテーも食べた。そして狂った。まるで狂うのが義務であるかのように、私はキノコを食べたのだった。

２０１１年１０月３１日（前書き）

※この作品は作者の日記ではありません。

2011年10月31日

10月31日（月）

週明けである。今日から日中の人通りが減ると思うと、思わず外に出たくなってしまう。これは狂いが解消されてきた証拠だろうか、それとも酒を摂取しなくなったからこんな活発なことが思いつくようになったのか。私は散歩へ出てみようと思いついた。そんなことよりハローワークへ行くべきではあるが、気分が乗らなかったので私は無目的に外を歩き回った。そしてすぐ家に帰った。寒かったからである。寒さのあまり、冷たい空気が胃を刺激して、歩きながら一度吐いた。唾と唾液しか嘔吐物には含まれていなかった。

猿というペンネームの作家が書いた小説「このキノコ人間が、」を読み終えた。読みづらい文章が余白は許さんとばかりにぎっしりと書きこまれた、退屈ではあるが嫌いではない小説だった。人が殺される様子が子細にグロテスクに描かれている小説よりは好みである。しかし普通の娯楽小説に比べれば退屈である。ペンネームが普通だったら、きっとこの本は売れなかっただろう。というか、この本は売れたのだろうか。図書館にある本は売れた本であるとは限らない。

久々にメーラーを開き、猿にメールを出してみた。内容は小説の感想である。猿というペンネームの作家が書いた小説は、嫌いではないが退屈でした、みたいな文面を作成して送信した。メーラーには出会い系業者の広告メールが届いていたのでそれらはすべて削除した。すると猿からのメールしか残らなかった。

晩餐の席に出されたのは肉まんだった。そんなに母は私のために料理するのが嫌なのだろうか。しかしキノコのサラダは添えられて

いた。私はキノコを食べて狂わなければならない。狂っていなければ平常心を保てない。なめくじとのやり取りで、私はそれを確信した。

２０１１年１１月１日（前書き）

※今日の更新内容は現実とは一切の関係がありません。もちろん昨日分も、一昨日分も、それ以前もです。

2011年11月1日

11月1日（火）

パソコンでインターネットを用いて筋肉少女帯の歌を聴いていると不安な気持ちになってくる。たとえ昼でも、である。深夜に比べて感受性が落ちると一般に言われている昼のほうが、狂っている私としては不安になる率が高い。それとも昼間に不安になるようなことをやっているのが原因か。例えばインターネット等。

実は家からは時間をかければイオンモールまで歩いていくことができる。なので歩いてみた。一時間近くは歩いたと思う。到着しただけで私は疲れ果て、入ってすぐの食料品売り場で空腹に悩んだ。それでも私は奥に進んだ。せっかく苦労して到着したのだから、少しは見て回らねば損、そんな風に考えたのである。周囲は田んぼばかりで、特に見るものもないことだし。そして私はイオンモールの奥へ奥へと進んでいった。よく知らないブランドの洋服店、サンリオのキャラクターショップ、小規模な楽器店などを経て、私は最奥のゲームコーナーにたどり着いた。そこで私は人がプレイしているポップンミュージックをひとしきり眺めた。私は泣いていた。何をやっているんだと、私は泣いていた。

そんなにゲームができないのが悲しいのであれば働くべきである。私は金曜日には必ずハローワークへ行って仕事を探そう、と心に誓った。金曜日は遠いが、明日は病院へ行って大きく心変わりする可能性が高いが、それでも一応誓ったのである。しかしきっとこの決意は心変わりすることだろう。私はそんな人間だからだ。これは狂っているとか関係なく、生まれつきそうなのである。そういえば、以前医師が言っていた。人間には狂いやすいタイプというものが存在する、と。私はそうなのだろうか。自問したところで答えが出る

わけがない。覚えていれば明日の病院で尋ねることにする。

ゲームセンターからの帰り道、イオンモール内で元編集者とすれ違った。すれ違っただけで、言葉も交わしていなければ目も合わせていない。元編集者は背広を着ていた。何の活動をしていたのだろうか。それから一時間弱歩いて家に帰りつくと、母と新しい編集者が打ち合わせをしていた。私は空気のようにその脇を通り抜けて自分の部屋に戻っていった。居間から漏れ聞こえる打ち合わせの音声によると、母の新しい本がもうすぐ出版されるらしい、とのことだった。タイトルは忘れたが、忘れる程度にインパクトの薄いタイトルだったことは確かである。

晩餐の席では牛丼が出された。これは牛丼の素を使って作られたものだろうか、やはり母はもう私にちゃんとした食事を作るのが嫌になったのだろうか。分からなかったが、とにかく刻んだキノコは混ぜ込まれていた。私はそれらをまとめて食べた。そして狂った。狂ったまま意識を失った。気を取り戻した現在。午前三時である。

２０１１年１１月２日（前書き）

※この作品はフィクションであり、作者の現状とは一切の関係がありません。

2011年11月2日

11月2日（水）

概念。眠りという概念。こうして晩餐に出されたキノコのせいで狂って深夜まで意識をなくし、そのまま日記を書きながら朝を迎える毎日を迎える私は、正常に眠れているのだろうか。狂って気絶することは、眠りとは呼べないのではないだろうか。だから私はこのところ、午前中から午後にかけて寝ることが多いのではないだろうか。そんな分析しても、自分の役にしかたたない。いや、自分に対してどんな役に立つのかすら想像できない。とにかく明日は祝日だ。朝のテレビのニュースを見ていて、それに気が付いた。

病院へ行った。自分は狂いやすいタイプなのか、と私は医師に尋ねてみた。昨日思う着いた質問内容を奇跡的に覚えていたのである。「あなたは先天的に狂いやすい体質なんですよ」と医師は教えてくれた。それを掘り下げた質問をしようと思ったが、どう掘り下げたものかわからなかった。そして掘り下げ方がわからないまま、黙っていたため、そのまま診察を打ち切られてしまった。やはり世の中の人間は私を話すことが嫌なようである。

家に帰ってパソコンのメーラーを開いてみると、猿からの返信が届いていた。「ご感想ありがとうございます。今度出る新刊をお送りしたいと思うのですが、どうでしょう」送るにしても、私の家の住所を知っているのだろうか。きっと知っているのだろう。どうやって知ったのかはご存じない。私は、ぜひ送ってください、と返信を返した。重ね語である。

晩餐の席で出されたのはアイスと冷やし固められたキノコだった。さすがにこれは抗議したほうがいいだろうか、それとも抗議したこ

とに腹を立てて「じゃあもう作らない」と言いたいがために、こんなメニューを饗したのだろうか。「文句ないの?」と訊かれた。妹に。久方ぶりに妹から話あっけられた。なので私はびっくりし、しばらく言葉を返せないでいた。数分立ってから、やっと、ある、と一言だけ返すことができた。「じゃあ言えば?」そんなことを言う資格は私にはない、と伝えた。「へー。どっちつかずなんだ。じゃあ死んだら?」妹はよく私に死ねという。子供のころから言われ続けてきた。なので慣れている。慣れているので傷つきもしなかった。

２０１１年１１月３日（前書き）

※この作品はフィクションであり、実在する人物・団体・事件とは一切の関係がございません。

2011年11月3日

11月3日（木）

今日はふれあいサロンの曜日なので車でふれあいサロンが内包されている保健センターまで連れて行かれた。すると保健センターは閉まっていた。私を車で運んだ私は忘れていたのだ、今日が祝日であったことを。閉まったままの保健センターの入り口でこれから夕方までどうすればいいのかわからず途方に暮れていると、元編集者がある気で現れた。元編集者も閉まっているため真っ暗な保健センターの中を見て呆然となっていた。しばらく呆然と立っていた。帰らないのだろうか。「帰ってもなあ。離婚したから一人だし」自分が結婚していたことがある、ということを私に自慢したくてそう言ったのだろうか？「まさか。そんな自慢、してもお前は悔しがらないだろ」確かにそうである。私は結婚に幻想が抱けない。しかしそんな私の性質を見破れるとは、まさか元編集者は私に興味があるのだろうか。「まさか。狂った人間が結婚なんてできるわけがない、俺はそう思っただけだよ」しかし、元編集者も狂っている。「ああそうさ。俺は猿先生が猿だったショックで狂ったさ、だから結婚していられなくなった。

それきり、何も話さずに私たちは夕方まで待った。何の刺激もない、つらい数時間だった。母は夕方迎えに来て、迎えに来た母に今日は保健センターが休みだったことを伝えたが、「そう」としか言わなかった。まあ、母が今更どんな理不尽なことを私にやっても不思議ではない。晩餐にアイスを饗したことすらあるのだから。

家に帰りついた私は、パソコンを立ち上げてワードを開いてみた。私の新しいノートパソコンにはオフィスがあらかじめインストールされていた。私はワードに何かを書こうかと考えてみた。しかし何

も思いつかなかった。そもそも何かを書いたとして、それを誰に読ませたらいいのか、思い当るところがどこにもなかったのである。とりあえず、メール友達と呼べないこともない、しかしこう呼ぶと相手は嫌がるかもしれない、そんな程度の関係性のある相手である猿に向けて何かを書いてみることにした。すると、するすると書くことができた。「このキノコ人間が、」の冒頭と、全く同じ文面が。私はそれを削除し、ワードを閉じた。

晩餐には一汁三菜が出された。まるで定食屋で饗されるようなまともな食事である。昨日の晩餐を見た妹が母に何か進言でもしてくれたのだろうか。「そんなわけないでしょ」尋ねてみると、妹は言った。妹は私に優しくなどない。きっと母が気まぐれでも起こしてまともに飯でも食わせてやろうか、そんな気になったのだろう。

２０１１年１１月４日（前書き）

※この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年11月4日

11月4日（金）

朝、起きると母に呼ばれた。そういえば朝に目覚めるのは久しぶりだ。そんなことを考えながら呼ばれるがまま、命じられるがままに私は朝の食卓に座った。母は私の正面に座っていた。そして私の目の前にはキノコが置かれていた。「昨日、食べさせ忘れていたわ。今食べなさい」どうしても食べなければならないのか、と私は尋ねてみた。「当たり前でしょう」母は言った。だから私はそのキノコを口に入れた。相変わらず赤いくせに味のないキノコだった。

目覚めたのは夕方だった。私は食卓に突っ伏した状態のまま目を覚ました。目の前には猿がいた。と思ったらそれは榎本なごみだった。どうして榎本なごみはいきなり表れるのだろう。いつも。いつも。「私はあなたにとって都合がいいでしょう?」その通りである。「だからだよ」自分は妄想である、と宣言したも同然の発言だった。私は悲しかった。少し、悲しかった。しかし涙を流すほどのものではなかった。うすうすそうなんじゃないかとは予想していたからだ。

それが喜びであれ悲しみであれ、感情の激しい動きは行動の原動力になる。私はパソコンのワードを開き、オリジナルの話を少し書いてみた。後のことなどは少しも考えないまま、登場人物を三人登場させた。この三人は恋をするかもしれないし、殺しあうかもしれない。登場人物には勝手に動いてもらうことにした。

晩餐に出されたのはカレーだった。適当である。テレビを見ていた妹に、晩餐に何を食べたのか訊いてみた。「焼きナス。あとそぼろの肉じゃが。味噌汁」やはり母は私の料理に限って手を抜いていた。そういえば、と私は晩餐の中にキノコを探してみたが、見つか

らなかった。キノコの処方は一日一回と決まっているのだろうか。

２０１１年１１月５日（前書き）

※この作品は作者の日記ではありません。

2011年11月5日

11月5日（土）

私が書こうとしている小説の三人の登場人物の性別の内訳は、男男女である。女は榎本なごみに似せて描写した。他の人物に似せると私を罵倒するだけの存在になりそうだったからだ。登場人物たちは勝手に動き始め、三人で動物園に向かった。しかし男の一人が財布を忘れていたため一人だけ入場料を支払うことができず、そのまま三人は公園で夕方まで過ごした。残り二人は男の代わりに入場料を出してやるつもりはないようだった。変な話である。

見ることもないのに午後のワイドショーを見ていると、パソコンでタイピングする猿の話題が出ていた。あのサルかも知れない、と思ったが、やはり猿の顔の違いなど分からなかった。しかしあの猿が私とメールを交換している猿かもしれない、そう考えると、見たくなくなったので私はテレビを消した。知り合いがテレビなんてものに出ているなんて、なんとなく嫌だ。

それから図書館へ行ってみたが夕方になっていたので閉館間際だった。私は「このキノコ人間が、」を返却し、急ぎ足で猿の別の小説を探してみた。すると「私とカエルについて」という文庫本を発見したので借りてみた。

晩餐にはシチューが出された。シチューのみであり。サラダも白米もない。もし私だけシチューのみという晩餐なのであれば、一人前のみのシチューを作ることはほかの二人と同じメニューを作るより手間がかかることなのではないか、と考えつつシチューを口に入れてみるとキノコが入っていた。食感的には邪魔だったが、味がないのでそれ以上の感想はなかった。相変わらず私はそれから狂った。

深夜に目覚め、「私とカエルについて」を少し読んでみると、驚いたことに恋愛小説であるらしかった。

２０１１年１１月６日（前書き）

※この作品はフィクションです。ですってば。

2011年11月6日

11月6日（日）

想像力が、創造力が湧いてこない。小説を書こうとしただけで私の気力は枯渇してしまったらしい。だから今日は書かないことにする。と決めていたら、パソコンの調子が悪くなった。変換機能が狂って、漢字に変換しようとしているのに半角カタカナに変換されてしまい、そのまま勝手に確定されてしまう。人の狂いは電子機器にも感染してしまうものなのだろうか。

だから今日はパソコンを閉じてひたすら小説を読んだ。「私とカエルについて」内での二人はつかず離れずの距離を保ったまま中盤まで差し掛かった。しかしやっぱりパソコンの調子が気になるのでもう一度文字を入力してみたが、結果は同じで、やはり半角カタカナで確定されてしまう。神が文章を書くなとでも言っているのだろうか。

どうしてもパソコンの異常動作が気にかかってしまい、とてもワードを開いていることなどできない。仕方がないので登場人物たちには頭の中で動いてもらい、それを手書きで書き記しておくことにした。榎本なごみに似せた女の登場人物が男の登場人物に唐突に殺されそうになった。いったいどうした。錯乱でもしたのか。

晩餐の席でパソコンの異常について母に話していると、そこに父が食いついてきた。父と話すのは何か月ぶりになるだろう。「見せてみなさい」と父が言うので、私はパソコンを父に見せた。「箱はないのか」と父は問うてきた。そういえば榎本なごみが持ってきたパソコンは箱に入っていた。父はそれを探った。するとサポートセンターの電話番号が記されていた紙が発見された。「明日、電話し

てみなさい」父は言った。父はそんなにパソコンが好きだったか。頭の中を探ってみたが、今まで私にそんなそぶりを見せたことはなかった。新発見である。

２０１１年１１月７日（前書き）

※この物語はフィクションであり、実在の人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年11月7日

11月7日（月）

起きると異様に汗をかいていた。何か嫌な夢でも見たのか、それともパソコンの調子が悪いのがそんなに心配なのか。起伏のない今の生活の中、パソコンの調子が悪いのは大事件である。それ故、こんなにも体が勝手に慌ててしまっているのだろうか。とにかく目覚めたのは十時過ぎだったので、昨日父に発掘してもらったサポートセンターへの電話番号を使って電話した。そして言われるがままに「ツール」から「プロパティ」を選択し、「プロパティの設定を規定値に戻す」を選択した。すると文字入力機能は正常値に戻った。

午前中にニュースを見た。動物園から珍しい猿が逃げ出した、というニュースである。ニュースを主にインターネットで仕入れている私としては、テレビで初見であるニュースを目にすることは稀である。地域ニュースだったからだろう。最近の私は、自分が住んでいる地域のニュースを取り扱っているサイトをあまり見ない。逃げ出した猿は目がパッチリしていて背筋がピンと立っているのが特徴、とニュースは報じていたが、私には猿を見分けることなどできない。時折人間だって見分けられなくなるくらいなのだ。

私が人間を見分けられないことがあるのは、狂っているからではない。と思う。これは先天的なもので、人間のパーツの特徴を頭に留めておくことができない脳というものが存在する。私の脳はそれに該当している。と、私は病院の初診時に告げられた。病院の初診時には、簡単な知能テストのようなものを受けた。人間の顔のパーツが描かれたパズルを完成させよ、というテストで、私は一分以上かけてパズルを完成させ、しかも右目と左目が逆であることに指摘されるまで気づかなかった。パズルの成績はきっと平均以下だった

のだろう。まあ、人間の顔が多少分からないくらいで生きていくのに苦労はしない。そんなことより狂ってしまっていることのほうが重大な問題である。

文字入力機能が治ったので、文章の執筆を再開させた。架空の人間が架空の物語を演じるのだから小説と呼んでもいいような気もするが、それは本物の小説に対して申し訳ない気がするのでこれからは文章と表記する。ただ文字が並んでいるだけの一物なのである。その文章の中で、登場人物を今日も勝手に動かせた。前回は殺し殺されかけていた男と女の登場人物が、今日はベッドで二人寝していた。どうやら私が完成させようとしているのは男と女の愛憎劇であるらしい。冒頭の動物園のくだりはいったいなんだったのだろう。

晩餐の席で生姜とキノコのスープが出された。私は汁を少し飲んだだけで昏倒した。そういえば、昨日の晩餐にはキノコが含まれていなかった気がする。一日置いてキノコを食べただけで、こんなにも激しく狂うものなのか。狂いへの耐性が、私はまだ完成されていないようである。

２０１１年１１月８日（前書き）

※この作品は作者の日記ではありません。

2011年11月8日

11月8日（火）

郵便受けを覗くのは私の役割ではない。しかし、今日はなんとなく郵便受けを覗いてみた。すると一通だけ私宛の荷物が届いていた。それだけを持ち、残りは郵便受けの中に放置して部屋に戻った。荷物は手紙にしては分厚く、それ以外のものとしては一つしか思い当る大きさのものがなく、その思い当るものとはハードカバーの本だった。封を解いてみると、それはやはりハードカバーの本だった。表紙には大きなゴシック体で「このキノコ人間が。」と書かれていた。作者は猿で、訳者の欄には母の名が書かれていた。いったい母は猿の何を翻訳したというのだろう。それにしても、タイトルである。私がこの前読んだ「このキノコ人間が、」の「、」が「。」に変わっただけである。こんなにも似偏ったタイトルの本を出してもいいものだろうか。それともこの本は「このキノコ人間が、」の続編なのだろうか。そんなもの、読んでみなければわからない。なので読み終えてから考えることにした。

しかし読書とインターネットばかりの日々にいい加減嫌気がさしていたので、少しは気が晴れることを期待して金はないが外を歩いてみることにした。やはり平日なだけあって、人の姿は少ない。それ故、すれ違う人間の一人一人が印象に残りやすい。私がすれ違う相手にしても然り、だろう。今日は学校をさぼっている風の小学生くらいの男とすれ違った。相手は私をすれ違いざまに凝視していた。私はどう思われたのだろう。きっと不審者と見られたに違いない。狂った人間は不審者に見られがちである。

帰ってきたら来客があった。扉を開くと「初めまして」と来客が言った。しかしそれは榎本なごみだった。「どうして私の名前を知

っているんですか？　あてずっぽうで当てたとしたら、それはすごいことですよ」私も榎本なごみの態度を不審に思った。どうして関係がリセットされてしまったのだろう。

晩餐の席で生姜とキノコのスープが出された。その汁を飲んだだけで、私は昏倒した。そして深夜に目を覚ました。机に突っ伏したまま目を覚ました時、主菜は片づけられていたが、スープのカップだけはそのままだった。今日は狂いの発作が激しい。そういえば、昨日はキノコを食べていなかったような気がする。一日抜いただけで、狂いに対する耐性は落ちてしまうものなのだろうか。以前はそんなことはなかったはずだ。どうしてなのか。

２０１１年１１月９日（前書き）

※この作品は日記という形式をとってありますが、作者の日記ではありません。

2011年11月9日

11月9日（水）

今の自分に何ができるのか？　履歴書を買う金もなければ何かをやろうという気持ちすら起こらない、パソコンを使って文章を書いているがそれを見せようとしている相手は猿なのだ。しかも猿は動物園を脱走した。あの猿なのかは分からないが、猿が私の書いた文章メールで送信しても読んでくれるとは限らない。私は何もできないのだ。そう考えると泣きそうになったが、止めておくことにした。まるで自分が何もできないことを認めるみたいだったからだ。

昼ごろ目を覚ますと、自室の階下の居間で母と誰かが話している声が聞こえてきた。こっそり見に行ってみると、母と元編集者が話していた。しかもその内容は仕事の話のようである。どうして編集者をやめて狂人の仲間入りをしたはずの編集者が母と仕事の打ち合わせなんてやっているのか、どうしてなのかわからなかったので見つからないように部屋に戻った。昨日の榎本なごみのことといい、どうもおかしい。もしや、と思ってしばらく待ってみると、階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

ノックもなしに部屋に入ってきた（元）編集者に私は尋ねてみた。この部屋の何かを破壊するつもりなのか。「よく知っているね」この前退職したのではないのか。「そんなわけないじゃないか」やはり、編集者との関係もリセットされてしまっている。そこで、編集者から聞いた話をしてみた。猿というペンネームの作家は本当に猿であるらしい。と。「そんなわけないだろ。あの猿先生が猿なんて。それにしても、どうして僕が猿先生を尊敬していることを知っているんだい」上から目線で編集者は言った。そして続けた。「それにしても、この部屋にはこれ以上破壊できそうなものがほとんどない

なあ」私の部屋のものは編集者にあらかた破壊されてからそのままになっている。修繕費や代わりのものを用意する金などを私を見損なっている私のの家族が用意してくれるわけがない。壊されていないものと言えばノートパソコンくらいだ。というわけで、編集者はきっとノートパソコンを破壊するだろう。しかし、私はそれを死守するつもりである。例えどんなにみっともない格好になろうとも、泣きながらしがみついて破壊するなこの野郎とズボンの裾を掴むつもりである。「そりゃあ不気味だ。ぞっとするね。分かったよ、やめておこう。君がこれ以上不幸になるとも思えないし」そうだろうか？　と思ったが、せっかく引き下がってくれるのだから、と、私はそれを口に出さずに編集者が立ち去るのを一歩も動かずに見送った。

晩餐の席に鍋が出された。具はウインナーと白菜と肉団子と鮭とネギと豆腐と糸こんにゃくと練り物の団子と、とにかくなんだか名称のわからない鍋だった。私の取り皿にだけ、キノコが入っていた。父も妹も、私と同じ鍋をつついた。まるで今まで何事もなかったかのように、私と普通に言葉を交わした。何があったんだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8369v/

このキノコ人間が。

2011年11月10日03時04分発行